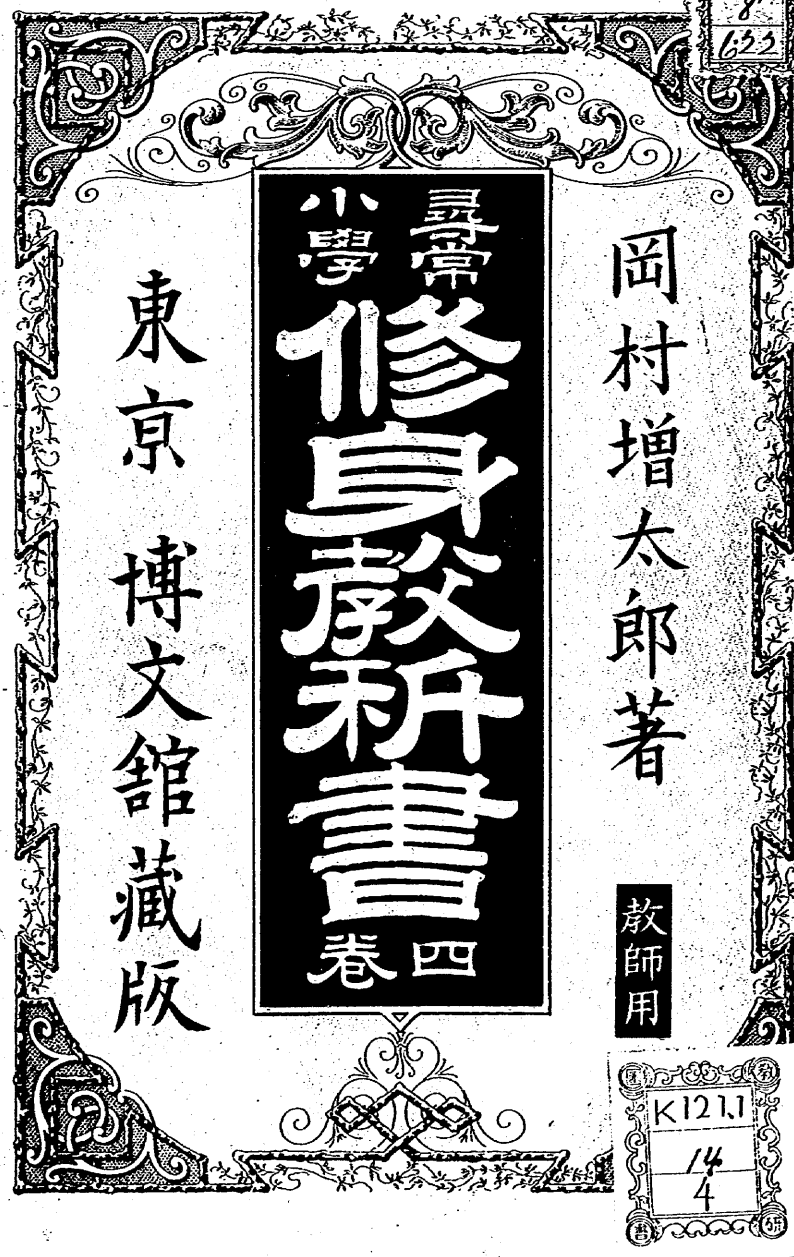
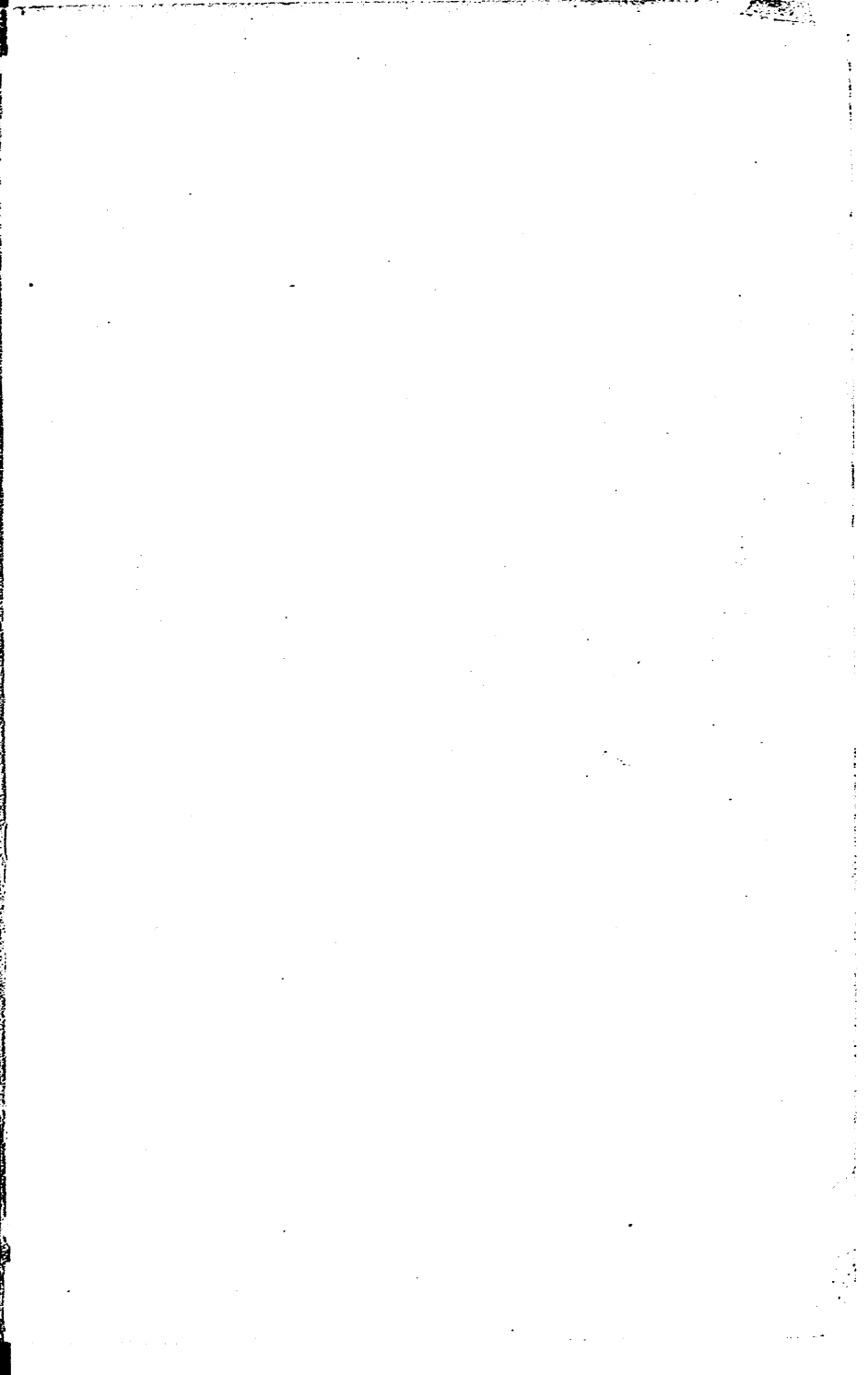
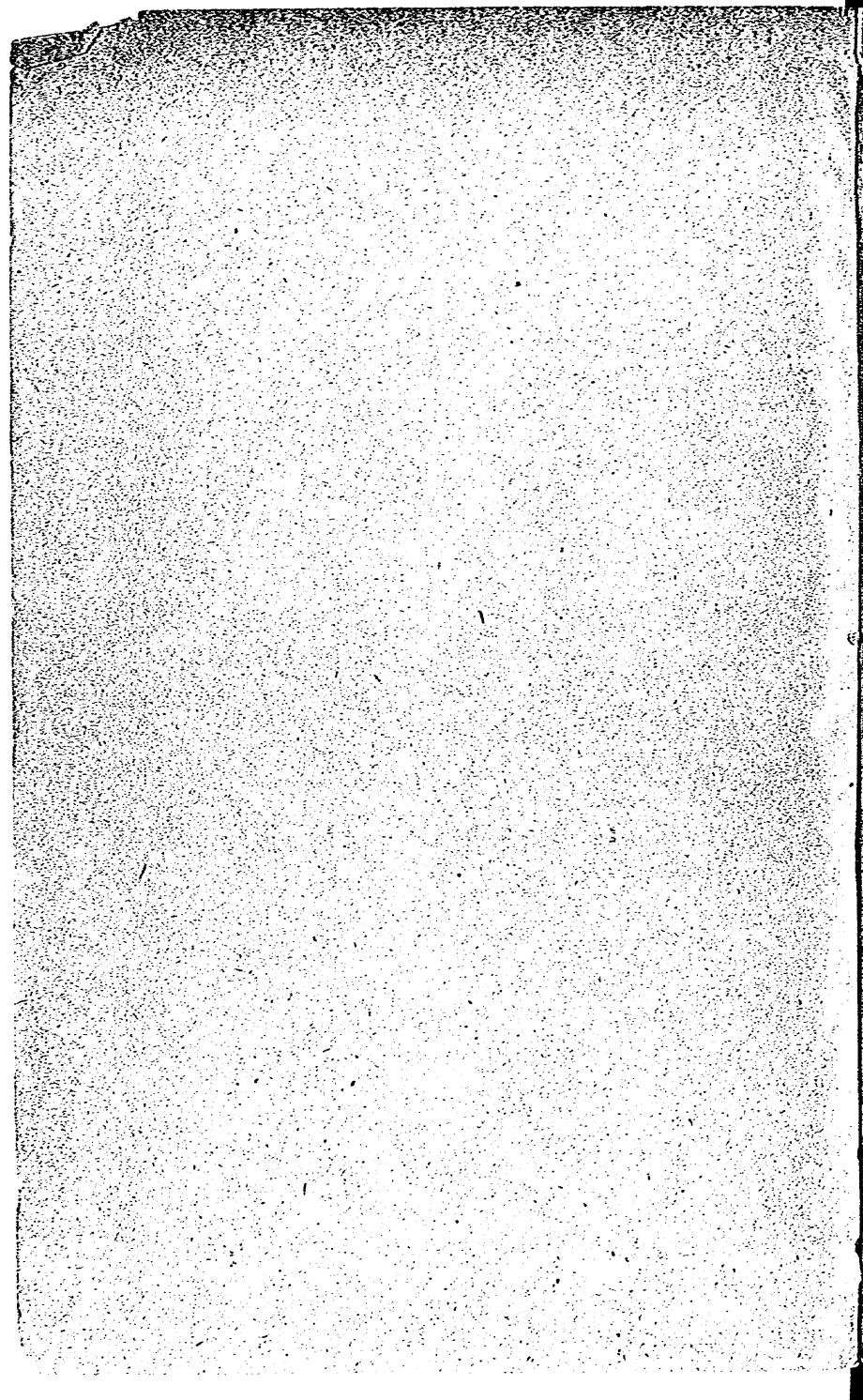




K121.1

14

4



岡村増太郎編

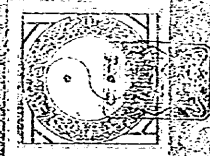
教師用



尋常
小學
修身教科書

四卷

東京 博文館藏版



小學修身教科書教師用第四卷目次

孝行	一
友愛	三
交友	六
信義	九
公益	一二
廉潔	一六
愛國	一九
勤儉	二三
勤王	二六
博愛	三一
仁慈	三四
節制	三八

立志	四一
攝生	四四
報恩	四七
貞節	四九
勉強	五三
謹愼	五六
忍耐	五九
容儀	六二
謙遜	六五
守分	六八
惜陰	七一
節儉	七四
武勇	七六
節義	八〇

習慣	八四
勉強	八六
改過	九〇
正直	九三
忍耐	九六
遵法	九八
勤學	一〇一
果斷	一〇三
立志	一〇六
孝行	一〇
尊王	一一三
愛國	一一七
孝行	一二九
友愛	一二三
仁慈	一二六

尋常修身教科書教師用第四卷目次終

尊王	公平	義勇	寛大	處事	勤學	節制	借陰	正直	仁慈	公益	果斷	沈勇	勉職	節儉
.....														
一七二	一六八	一六六	一六三	一五九	一五七	一五三	一四九	一四七	一四四	一四〇	一三八	一三四	一三一	一二九

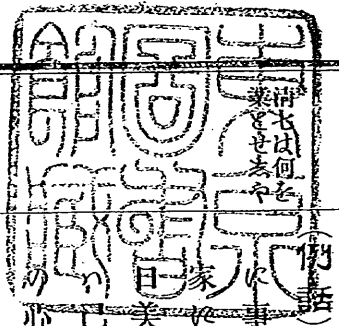
目次

四

尋常修身教科書 尋常第四年級 教師用

孝行

岡村増太郎編



（例話） 清七は河内の國の人にして樵を業とせり、善く親に事へて孝養を盡しけり、其の母は若かりし時に富豪の乳母となり、久しく奉公せしに由り家に歸りて後、其の母は粗食すれども、母は其の好める美味を供へて、其の心を悦ばしめたり、或る時母は鵲の炙り物を食したるに、所望しけれども、鵲は容易に得難きものかき、清七は大に心を痛ましめたり、然るに一夜窓に何物かはたと當

孝行

如何にして
母の食膳を
供えよ
か

りて音にければ、何ならんと怪みて戸を開き見れば何處より來りしか、一羽の鶉ありて埒に迷ふの狀なれば、天の賜物なりとて直に之を捕へて、翌日之を調理して母の食膳に供えしかば、母は大に喜びて之を食らけるとぞ、人以此て孝感の致を所となせり。

(格言) 父母に事へて、能く其の力を竭す。(論語)

(教授要旨)

- (一) 父母は我を生み育てしものなれば、年老いたる時は能く其の心を喜ばしむべきこと。
- (二) 孝養を盡すに、父母の心を安するを以ちて第一とすべきこと。
- (三) 父母の意に逆らひ戻るまじきこと。
- (四) 父母の好むべき物の捧ぐべきこと。

(教授方法)

前學年より於きて授けたる、長吉の孝養、蘆田七左衛門の孝行、松平好房の孝順、神武天皇の御孝行、中江藤樹の孝行、やす女の孝養、綱引金村の孝行など、本課の事實と格言とを、説述したる後、之と比較對話すべし。

(問詞)

- (一) 清七は、何國の人にして、何を業とせしや。
- (二) 清七の母は、如何なる處に奉公せしや。
- (三) 其の母は、何を欲せしや、清七は、如何にして母の意を充たせしや。

(應用問詞)

- (一) 父母は孝養を致せ、どの如何ある意か。
- (二) 孝は、愛を以ちて本とす、どの意味を語せ。
- (三) 遊ぶ所必常あり、どの如何。

友愛

何故^ニ新羅
三郎といふ
か

義家の言葉
を述べよ

(例話) 源義光は伊豫守頼義の子にして義家の弟なり、元服を新羅明神社にて加ふ因りて新羅三郎と稱せり、幼にして弓馬を善くし長するに及びて勇にして智謀あり、左兵衛佐となり京師に宿衛す、是の時に當り兄の義家ハ、出羽の勁賊清原武衡及家衡を征伐しけるが、軍利あらずと聞き大に之を憂ひ、奏して之を援はんことを請ひしかども許されざりしかば、遂に官を辞して出羽へと赴きけり、義家大に喜び感泣していひけるは、今日汝を見るハ尙先大定の再生するが如し、力を戮せて賊を討ち之を破るハ必定なりと、遂に義家ハ従ひて金澤柵を圍みて陥れ、出羽悉く平ぎ尋ぎて義家に従ひ京師に歸る、朝廷議して其の友愛の情に感じ、且其の功に愛で、其の罪を問はざりし、後

刑部丞に任ぜられ、常陸介甲斐守を歴て從五位上に叙せられ、刑部少輔に至りしと云ふ。

(格言) 兄弟に接するにハ、友愛を盡すべし。(徳川家康)

(教授要旨)

- (一) 兄弟ハ、同胞なれば互に睦しく交るべきこと。
- (二) 兄弟を愛し、弟ハ兄を敬すべきこと。
- (三) 兄弟ハ、互に相救助すべきこと。
- (四) 兄弟ハ、父母に次ぎて親きものあれば互に疎にすべからざること。

(問詞)

- (一) 義光ハ、如何なる人なりや。
- (二) 義家ハ、何處にありて、軍利あらざりしや。
- (三) 義光ハ、之を聞きて、如何せしや。
- (四) 戦後、京師に來り、如何に處せられしや。

(應用問詞)

- (一) 兄違ふありて、困難せりと聞かば、汝等如何にするぞ。
 - (二) 弟の敬ふして、順どの如何。
 - (三) 兄の其の弟を愛し、弟の其の兄を敬す、どの如何。
- (書取題案) 左の句を假名よて書取らしむべし
- (一) 兄の愛ふして友
 - (二) 兄弟は接するよの友愛を盡すべし

交友

藤森弘庵は
何故に牢屋
に入れられ
しか

(例話) 田口文藏の江村と號し、膽畧あり、朋友は交るに極めて信實懇篤を旨とせり、嘗其の友藤森弘庵といへる人、徳川氏の末年にあたり、時事を痛く論じ、弊政を罵りしかば、遂に牢獄に繋かれたり、江村之を聞き、何とかして之を

救はんと欲し、東奔西走して盡力せしかば、終に其の厄を免れ、速に出獄し得るに至れり、或る人江村の爲に危きを犯かすなかれと切に諫めしが、江村笑ひていへるに、我豈難を悞れて平生の友誼を棄つるに忍びんや、とて少しも恐れずして遂に之を救ひ出せり、時の人皆感歎せざるはなかりしとぞ。

(格言) 朋友の悲には、早く往け。(西語)

(教授要旨)

- (一) 信と義とを以ちて、朋友に交るべきこと。
- (二) 朋友の互に苦樂を共にすべきこと。
- (三) 一旦交りたる朋友に、終始友誼を盡すべきこと。
- (四) 益友に、殊に信實を盡すべきこと。

(教授方法)

讀書に陥らざるやう注意し、歸納的に教授して、實踐躬行を奨励すべし。

(問詞)

- (一) 田口文藏の如何なる人なるぞ。
- (二) 藤森弘庵の如何にして牢獄に繋かれしや。
- (三) 文藏の之を聞きて如何にせしや。
- (四) 弘庵は後如何になりしや。

(應用問詞)

- (一) 朋友某が放課後、學校に留置せらるゝと聞かば、汝等如何にするぞ。
- (二) 友の偽ならぬを第一とす、とい如何。

(書取題案) 左の句を口誦して書取らしむべし

- (一) 貧賤の交に忘るべからず
- (二) 誠の物の終始なり
- (三) 朋友の悲に早く往け
- (四) 諸處をかけたなりて之を救ふんとせり

信義

清正の人となり語れ

清正の答辭は如何

(例話) 加藤清正は豊臣秀吉に従ひ屢戦功を立てたり、後肥後の國熊本の城主となれり、性驍勇精忠にして又信義を重せし人なり、朝鮮征代の時淺野幸長蔚山城を據守せり、明の援軍大舉して來り攻め城の陷る且夕にあり、清正之を聞き蹶然救援せんとせり、時は清正は機張にあり、蔚山を去る三日程なり、諸將之を止めて我が兵の蔚山にあるもの三分の一なり、今此の處に其の半を留むる時は、其の兵五百騎に過ぎず、寡兵を以ちて大衆に當る、他の良策あるにあらざきは敵に難し、宜しく檄を諸將に飛し、大軍を會し、後赴き援くべしと、清正答へて、吾國を辭する時に淺野長政我に囑して急あらば我が兒を助はよと囑せり、

今日之を棄て、若陷ることあらば、我何の面目ありて再長政を見ることが得んと、遂に寡兵を率ゐる雲霞の如き明の群兵を突く、明兵相顧み驚きて曰、鬼上官來ると敢當るものなり、是に由りて輒く蔚山城に入り幸長を援くることを得たり、後清正到る處武勇を振ひ、英名を異境に揚げ、永く韓人の記憶に存せんと云ふ。

(格言) 其の誼を正しくして、其の利を謀らず。(兼仲舒)

(教授要旨)

- (一) 朋友の道は、信義に在るべきこと。
- (二) 互に相救助するは、人生の美德たること。
- (三) 信は、朋友と交るの要道たること。
- (四) 約は必履み行ふべきこと。

(教授方法)

島山重忠の信義、劉元城の信義、名和長年の信義と比較類推せしめ、然る後題目の解釋より事實と説き及ばし、種々の問答をなしつつ、格言の俗解に歸着すべし、後各生徒をして、實踐躬行の方法を語らしむべし。

(問詞)

- (一) 加藤清正は朝鮮征伐の時長政より如何なる事を託せられしや。
- (二) 幸長は、如何にされしや。
- (三) 清正は、幸長の危きを聞き、如何にせしか、且諸將は何を以ちて、清正を諫めしや。
- (四) 鬼上官の名稱は、何故あるぞ。

(應用問詞)

- (一) 朋友には信あり、とは如何。
- (二) 輕しく諾すれば信寡し、との意味を語れ。
- (三) 約束は必之を履行すべし、といへる意を唱せ。
- (四) 人の行は信を本とす、との意解をなせ。

(五) 甲乙二人の生徒あり、甲生は病氣にて二三日關課せり、或る日出核して其の關課せし處を、乙生に問ひしに、乙生は快く之を教へたり、乙生の行爲につき汝等如何に感せしや。

(書取題案)

- (一) ○○に○○○れ口○かりしことあり
- (二) □□して□にかこみをやぶりたり
- (三) □ノ□ナ□シ□シテ□ノ□ナハカラズ
- 左の句を漢字交りにて書取れ
- (四) 信以ちて之を爲す君子なる哉
- (五) 信實は人に交る道なり

公 益

(例話) 中島藤右衛門は常陸の國久慈郡諸澤村の人なり、

久慈郡の地味を問ふ

藤右衛門が蒟蒻粉を發明せし何ぞよ原因する

藤右衛門の損失せし何によるか

其の地は山間の瘠土にして、水陸の田に乏しく氣候風雨少しく異り、ある時は饑饉の憂ありて、諸人の飢る苦むことを深く慨きて、一の物産を起し之を救済せんと欲せり、蒟蒻は最も此の地に適ふたるを認めたれども、栽培するもの日増に多く價も漸廉に傾き利益も薄くなれば、之を救ふの工夫をあさんと専心力を勞せり、其の後藤右衛門畑の畔に蒟蒻玉の切片日に晒さき白く凝りたるを見て大に悟る所あり、蒟蒻玉の塊根を薄片とし、乾して石臼にて粉となし食料に供せしに頗美味ければ、茲に始めて年來の望を達したり、然るども未製粉の宜しからざる所あるにより、水車を利用し大に製造に力を用ひ、盛に製造して諸國に送りしが、新規のものなれば買客多からざる

爲大い損失をなしたり、然れども少しも屈する色なく、益資金を投じて販路を廣くし、製粉に精力を盡し改良せしかば、終に世の人に信用せられ一大物産となりたり、其の販賣高一ヶ年に金高三十萬圓に達し、全郡舉りて此に従事するに至れりと云ふ、是藤右衛門が平常心を公益に注ぎたる賜なり。

(格言) 人民の利益を増し、邦國の幸福を大にす。(ヘンメイリス氏)

(教授要旨)

- (一) 世間公衆の利を謀るべきこと。
- (二) 人は公益を擴むべきことに意を注ぐべきこと。
- (三) 自國を富ますべきことを務むべきこと。
- (四) 國民は國益を起すことを忘るべからざること。

(教授方法)

名取彦兵衛製絲器械の創造、黒井幽量水利の開鑿等の大畧を生徒に語らしめ、後教師中嶋藤右衛門の辛苦して、蒔弱玉を粉となせしことより、格言の意味を、克く解釋して以ちて、其の觀念を鞏固にすべし。

(問詞)

- (一) 中嶋藤右衛門は何國の人にして、其の住居せし土地は如何。
- (二) 何を植ゑ付けしや、何よりこんよやく粉を製することを發明せしや。
- (三) 製粉は、始めて如何にありしや。
- (四) 其の産出額は、何程なるか。

(應用問詞)

- (一) 人の害を除き人の利益を興すべし、その意義を説け。
 - (二) 廣く利益を謀れ、その意解をなせ。
 - (三) 進みて公益を廣め世務を開きといへる勅語を解釋せよ。
- (書取題案) 左の句を書取らしむべし
- (一) 公益とい國の爲世の爲に幸福を謀りて已一人の爲にせざること

云ふなり

- (二) □□ノ□□チマシ□□ノ□□チ□ニス
- (三) □□は□の□にありて□□はあはだ□しかりき
- (四) □□□□□□を□よせいすることを□□したり

廉潔

忠秋の人となりは如何

(例話) 阿部豊後守忠秋は、徳川幕府の老中職たるを、三十餘年威權最強く勢甚盛なり、後四代將軍の輔佐となる、資性廉直にして敦厚なり、當時都下の士人好みて鶉を養ふこと流行せり、忠秋も亦之を好みて常に鶉籠を坐前に置きけり、一諸侯けなみよき鶉を購ひ得て、美麗なる籠に入きて醫官に由りて之を獻じ、媚を求めんとせり、忠秋喜ばずして我鶉を好み家に飼ひ置く爲、他人より鶉を贈らるる

忠秋の答辭を述べよ

に至ると、左右に命じ籠を開きて以前より秘藏せし所の鶉を放たしめたり、醫怪みて其の故を問ひければ、忠秋は之に答へて、予輔佐の重位に居り人に趨附せらる、宜しく好む所あるべからず、近頃過ちて鶉を好み忽に世に傳播す、吾大に悔ゆ今よりして復鶉を好まざるなりと、醫大に慙ちて退きたりと云ふ、是より其の後は忠秋の氣性に恐れて、賄賂を送るものとして、一人もなきに至りしとぞ。

(格言) 以ちて取るべし、以ちて取るこそ分かるべし、

取れば則廉を敗る。孟子

(教授要旨)

- (一) 君子と小人との分るゝ義を好むと、利を好むとの間にあること。
- (二) 廉直なる人、他より愛重せらるること。

(三) 廉潔は、上より立つものゝ、最必要なる行たること。

(四) 如何なる場合に遭ふとも、利に走らずして、斷然義に就くべきこと。

(教授方法)

松本長七の廉潔、農夫喜作の廉潔、彭思永の廉潔、湯淺子潔の妻の廉潔につき、其の大畧を比較説話せしめ、然る後格言を講述して、漸次事實の詳細を説明し、以ちて廉潔の大要を知了せしむべし。

(問詞)

(一) 阿部忠秋は、如何なる人にして、當時の流行物の何あるぞ。

(二) 一諸侯鶴を忠秋に呈せしとき、忠秋は、如何にせしや。

(三) 何故に醫師は、大にはぢしぞ。

(四) 三十餘年老中職を勤続せしは、何によれるか。

(應用問詞)

(一) 往來にて何れの人とも知らぬものが、汝等より美しき錦繪を與へんといひ、之を受取るべきや否や。

眞三が戦功を立てしは、何れの役か

愛國

(書取題案)

(一) □ナテ□ルベシ□ナテ□ルコトナカルベシ□レバ□○○ナ□ル
(二) 家に———
ことごとく□○すてけり

(例話)

磯林眞三は土佐の國高知の藩士なり、陸軍に奉職し、明治八年臺灣の役、全十年西南の役等に從事し、大に戦功を立てたり、明治十五年朝鮮大院君の乱あり、公使に隨行して大に盡力する所あり、後公使館附を命ぜらるゝ、是より

朝鮮京城の
變は明治何
年何月か

り後朝鮮に在りて公務に執掌し、彼の國語を學べり、明治十六年歩兵大尉に任ぜられ、正七位に叙せらる、常に國を憂ふる心深く、朝鮮に我が邦に近ければ、一旦事ある時の用をなさんとして、朝鮮内地の地理を調査する事に熱心し、八道中大略探らざる地なきに至り、明治十七年十二月に當り朝鮮京城に變あり、暴民蜂起して王宮を圍みたり、此の時眞三は内地旅行の命を帶びて、語學生徒赤羽平太郎及從者を從へて、諸道の視察を終り、將に歸京せんとせり、偶變亂の起るに會す、人其の京城に入るを危おみ皆之を止む、眞三聽かずしていひけるは、己に京城の急報を聞きて、命を惜み難を避くるが如きは、日本男兒の爲さざる處なりと、刀を抜き奮戰攻撃大に敵軍を敗りたり、朝鮮人

眞三が逃れ
得べきを逃れ
れざるし其
の意は如何

大に驚き以ちて鬼神とせり、此の時一方の血路を得て逃れたらんには易き事なるも、眞三は日本男兒の勇武を輝さんと欲し、大軍を意とせず群る敵中に進入し、南大門に入らんとする僅に五六町あして、暴民の爲に圍まれ終に討死したり、其の屍を撿するに、全身傷かざる所なく慘狀觀るに忍びずといふ、竹添公使其の屍を歛めて、厚く之れを葬る、政府其の遺族熊一に、祭資料八千圓を賜ひしとなん。

(格言) 國を憂ふるものは、身をばからず。(谷心録)

(教授要旨)

- (一) 身を殖して、難を救ふは、忠臣なること。
- (二) 國を愛すること、家を愛するが如くすべきこと。

- (三) 國を愛ふること、家を愛ふるがごとく、敢一身の爲を計らざること。
- (四) 我々日本人は大和魂を以ちて國を守るべきこと。

(教授方法)

讀書と同一の教授法に陥らざるやう注意して、我が國に生れ、我が國の臣民たるものは、常に愛國の志念を養ひて、念々忘るべからざることと事實と格言との意解をなして、以ちて之を銘肝せしむべし。

(問詞)

- (一) 磯林眞三は何國の人にして、何の役を勤めしや。
- (二) 京城の變は、如何に所せしや。
- (三) 京城の變の時、何地にありしや。
- (四) 政府は、遺族に何を與へしや。

(應用問詞)

- (一) 已を後にして國を先にす、とは如何。
- (二) 當ふ忠義を以ちて國に報ゆべし、との意解をなせ。

(三) 臣の分は唯國を愛ふ、とは如何。

(書取題案)

- (一) □ナ○○○○モノハ□ナハカラズ
左の句を口誦して書取らしむべし
- (二) 國の爲には身を殺し骨をもくだくべし
- (三) 一旦事ある時の爲よとて其の内地の地理をしらぶることに骨折
けり

勤儉

(例話)

和泉の國の境に最貧しき商人ありしが、夫妻共に力を盡し商賣を勵みしかば、顧客日に増して繁昌しけり、二十年許を経て大ある商人となり、富み榮え手代をも數多使ひける大富限となれり、然るに其の妻は何處へ行く

大富限とな
りし何に
起因するぞ

妻の答へし
言葉と述べ

にも貧乏き時の衣類にて風儀を更へず、至りて質素あり
けきは、或る時夫のいひけるは、御身昔も今も質素なるの
感賞すべきなり、然れども今や昔と身代も異りて富有
なり、殊に女は衣服の美なるを樂とするものなれば、何に
ても望みの品は新調すべしと、妻は之に答へて、天子公卿
より我等の身分を顧みれば、盥褸を着ても尙其の身に過
きたり、然るに女の癖として人の好き衣服を見れば、其の身
分をも計らずして、妄に之に倣ひんとするは常として、妄
も見しもの、早既に調へ置きしが、着するを爲し得ざ
るなり、今朝も門外を過ぎたる女の美服を見て羨むに堪
へず、直に二三調へたりとて、簞笥の中より美麗なる衣裳
の品書を出して示せしかば、夫は大に感歎して妻の志を

稱せしと云ふ。

(格言) 家を、保つの道は、勤と儉とあり。(家道訓)

(教授要旨)

- (一) 人は、各其の業務に、勉むべきこと。
- (二) 其の業に勉むれば、富を得べきこと。
- (三) 人は、其の身分を謀りて、奢侈に流るべからざること。
- (四) 家道の隆なるは、勤勉と儉約とにあること。

(教授方法)

かせぐに追いつく貧乏なし、といへる諺の説話より、事實の詳細な説き
及ぼし、尋ぎて格言の解釋を以ちて収結すべし、然る後徐々生徒をし
て讀み且講せしめ、躬行實踐を奨励すべし。

(問詞)

(一) 堺の商人は、最初如何なる境界にありしや。

- (二) 妻の美服を着けず、質素なりし何の爲なるぞ。
- (三) 夫妻の問答の大略を述べよ。
- (四) 勤儉あれば、後に如何なる結果ありや。

勤王

義貞の何れに
誰の何世の
孫なりや

(例話) 新田義貞は上野新田郡の産にして義家十世の孫なり、祖基氏父朝氏世々茲に居す、後醍醐天皇の元弘三年車駕隠岐に移らせらるるや、護良親王吉野山に據り、楠正成千劔破に城を並び、兵を起して恢復を圖る、北條高時兵を發して之を攻む、義貞時に軍中にあり、竊に歸順の志あり、護良親王の令旨を得、大に喜び病と稱して本國に歸り、日に宗族子弟を會し、高時を誅せん事を謀れり、高時の兵大に京師に敗らる、吏を諸國に遣ひ糧を課し收斂甚急

高時の怒り
し何故ぞ

かり、義貞吏を捕へて梟す、高時大に怒り兵を移して來り攻めんとす、義貞即義兵を舉げ後屢々戰ひ終に鎌倉を陷る、高時自殺す、乃吏を馳せて捷を行在に奏す、帝大に喜び遙に義貞に左馬助を授く、建武元年入朝し從四位上に叙せられ、左兵衛督兼播磨守に任ぜられ、上野播磨二國を管せしめ京師に宿衛せり、帝方に足利尊氏を寵し其の言を聽信す、尊氏固異圖を蓄ふ、心に義貞を憚り毎に之を除らんを謀る未發せず、北條時行の兵鎌倉を襲ふ、尊氏を遣ひて時行を伐たしむ、既にして尊氏鎌倉に據りて反す、詔して義貞を大將軍節度使となす、義貞諸將に將と一行々戰ひ其勢大に振へり、尊氏窮促して爲す所を知らず、既にして散兵大に集り勢再振ふ、義貞利あらずして退く、時に

尊氏を征討
するときは
大將軍節度
使の誰ぞ

藤嶋神社と
誰の靈を
祀りしもの
のありや且
その格を問
ふ

諸國叛して尊氏に應ず、朝廷震駭して義貞を召還す、尊氏京師に入る、義貞奮戦して賊を退く、尊氏西へ走る、既にいて尊氏西國の兵を率る船して京師に入らんとす、楠正成と共に之を拒く、正成湊川に戦死し、義貞苦戦して退く、既にいて屢官軍常に利あらず、帝尊氏の款を容れ京師に歸らんとす、義貞をして北行して北陸諸國を徇へて恢復を圖らしむ、義貞皇太子及義良親王を奉じて北へ行く、後越前の國に赴き勤王の師を集め、銳を養ひ再京師へ入らんとし、屢戦ひたり、義貞藤嶋の砦を攻めんとし、自馳せ向ひしが流矢に中り、自刎ねて死せり、朝廷其の忠死を嘉み、其の靈を祭られて藤嶋神社と云ふ、別格官幣社たり、今に至るまで其の忠節を賞せざるものなり。

(格言) 君の難は赴くば、忠なり、王事は死するは、義なり。

(音 吉)

(教授要旨)

- (一) 君と國との爲に、其の力を盡すべきこと。
- (二) 忠臣は、其の身を惜まず、奉公すべきこと。
- (三) 君難に赴き、王事に死するは、忠義なること。

(教授方法)

既に教授せし菅原道真公の尊王、北畠親房公の勤王等につき、生徒をして其の大畧を説話せしめ、次ぎて本課の事實を問答しつゝ、講述し、格言を意解して之に收結し、然る後徐々に讀み且講話せしむべし。

(問詞)

- (一) 新田義貞は何國の人にして、何時義兵を擧げしや。
- (二) 高時を亡せしは、誰の功なるか、尊氏の鎌倉に反せし時、義貞は如何せ

しや。

- (三) 尊氏京師に入犯せしとき、義貞は如何せしや。
- (四) 尊氏、西國より來り犯せしとき、義貞は如何せしや。
- (五) 義貞の北行せしは、何の爲ぞ、何地にて忠死せしや。

(應用問詞)

- (一) 能く君に事ふるを忠と云ふ、とは如何。
- (二) 世に四恩あり、皇恩最重し、どの意解をなせ。
- (三) 王事に従ふは、知光大なり、とは如何なる意義か。
- (四) 忠臣の公を愛ふること、家の如くす、どの意義を、平易に説明せよ。

(書取題案)

- (一) 新田義貞○□□の□あつく□を□して北條高時○□ち滅しけり
 - (二) □ノナニ□□ハ□ナリ□□ニ□スルハ□ナリ
- 左の句を口誦して書取らしめよ。
- (三) 人臣の義は忠直を以ちて本とす

宗賢の家學をなすの外、
せしむるを研究せしむる

博愛

- (四) 君臣の義は天地の大義なり
- (五) 君の爲には必忠貞の心を盡す

(例話)

服部宗賢は大和國高市郡の人なり、家世々醫を業とす、夙より意を家學に用ひ、傍本草學を修む、稍長じて京師より出で、畑柳安、小野蘭山に従ひて學ぶ、歸後遠近治を請ひ、其の名世より顯る、後高取侯の醫官となる、宗賢家頗富む、然れども常に自奉すること節儉にして、仁惠に厚く好みて、效恤をあす、故に豊年の時は米を買ひて貯へ置き、凶歲にハ價を安くして賣りたれば、貧乏き人は其の恩惠を受けしこと幾何あるを知らず、且高取川の橋梁ハ、毎年大水の爲に落ちければ、人民大に困難を極めたり、宗賢之を憐み

宗賢の架し
たる橋を何
ぞに豊年橋
と名けし

自資金を擲ち堅固ある石橋を架けたりしかば、後水害に遇ふの患なく、人馬も安く通行することを得るに至りしかば、世人其の橋を架けし年ハ、豊よして穀物善く實りければ、此の澤を蒙り感歎せざるはなかりけり、特に此の橋を豊年橋と名づけしと云ふ、嘗江都にあり君侯劇疾に罹る、宗賢湯藥を進め日夜侍續すること數旬遂に癒ゆることを得たり、後秩祿百三十拾石に至り侯の寵愛を蒙りしと云ふ。

(格言) 福を求むる道は、恵を施すにあり。(言志老叢書)

(教授要旨)

- (一) 爾に出でたるものは、爾に反るべきこと。
- (二) 慈善は、人生の美德たること。
- (三) 幸福を求むるの道は、能く仁恵を施すにあること。

(四) 己を奉ずること薄く、人を待つ、厚くすべきこと。

(五) 博く人を愛し、恵を施すべきこと。

(教授方法)

仁徳天皇の御仁徳、井戸正朋の博愛は、前學年に於きて教授したれば、生徒をして其の大意を説述せしめ、漸次誘導して本課に入り、問答しつゝ、事實の詳細を講話し、陰徳あるものは陽報あり、との意より、格言に歸納すべし。

(問詞)

- (一) 服部宗賢は何國の人にして、何を業とせしや。
- (二) 宗賢は平生如何あることを行ひしや。
- (三) 石橋を架けたるは、何の爲なるぞ。
- (四) 君侯の寵を得しは何によるか。

(應用問詞)

- (一) 某地に大火ありて、貧困者の難義せるもの多きにつぎ、汝等の父兄が

救助の爲義捐金を出せしめせば其の行爲は如何。

- (二) 富める身分にあらざれば博愛の徳は實行すること能はざるか。
- (三) 博く衆を愛して仁に親む、どの意解をなすべし。
- (四) 用を節して人を愛す、とは如何なる意味ありや。

(書取題案)

- (一) 服部宗賢は〇〇〇にして□に□を〇〇し□〇〇〇〇〇〇て〇〇〇を□すことを□めり。
- (二) 〇〇□には□をかひかきて□□にあへば〇〇〇〇うれり
- (三) 〇〇チ□ムル〇〇ハ〇〇チ□スニアリ

仁慈

(例話)

奥貫友山は五平治と稱し、武藏の國入間郡久下戸村の人なり、世々豪族たり、友山若きときより學を好み、業

友山は誰に就きて學問せしぞ

恵みし村數及全活する人、數は如何し

を徳川幕府の儒官成島錦里に受け博く群書に渉る、學成り郷に歸り生徒を教授す、後河越侯の儒官となる、寛保二年關東大洪水あり、殊に入間郡は其の害を被ふること多かりしかば、友山は糧食を船に乗せ、從者と共に漕ぎ廻りて、飢ゑたるものには食せしめ、病ゑるものゝ家に連れ歸りて療養せしむるもの數百人、力を盡して救助せり、又父に謀りて後、大に倉庫を發き家の門前には、粥を賣て究民に施しける、此の年十月に始まり明年四月に至る、恵の及ぶ所四十餘村にして、全治するもの凡十萬六千餘人の多きに及びたりと云ふ、官之を聞き、其の行を褒め錢帛を賜りて門閭に旌はしたりと云ふ、時の領主川越侯よりも時服佩力を賞賜す、其の後明和年中上野武藏相摸の凶歲に

暴民何故に
友山の家を
か害せざりし

當り、愚民相集りて黨徒をなれ目に富豪を劫奪し、其の家
屋を毀ちて乱暴至らざるなら、將に友山の家も及はんと
す、一人走りて大に其の徒を呼び曰、是奥貫翁の居なり、昔
寛保の水災翁あるを以ちて、我が祖父父母兄弟をして生存
を得しむ、汝之を知るかと衆大に驚き、相與に顧みて我が
隣庇恩を報ずる所あり、而して反りて之を虐すべけんや
と門外に俯伏して去る、友山の家獨之を免るを得たるは、
即往年の陰德あるを以ちてなり。

(格言) 德、孤ならず、必隣あり。(論語)

(教授要旨)

- (一) 陰德あるもの、必陽報あるべきこと。
- (二) 窮困を救ふ、人生の美德たるべきこと。
- (三) 能く其の身分に應じて、貧民を賑すべきことを務むべきこと。

(四) 善行に、善報あるべきこと。

(教授方法)

情、人の爲ならず、かちふれて、袖に涙の、かかるとき、人の心の、奥ぞ知
らるゝ。之等の俗解より、仁慈の意義并に事實を、平易に説き去り、格言
の意解をなして、之に収結し、然る後問詞應用問詞により、生徒の了解せ
しや否を試むべし。

(問詞)

- (一) 奥貫友山、何國の人にして、何を業とせしや。
- (二) 友山、大洪水の時、何を爲ましや。
- (三) 明和年中凶歳の時、如何なることありしや。
- (四) 領主よりの待遇は、如何。
- (五) 寛保二年、關東大洪水ありしとき、奥貫友山、如何せしか。

(應用問詞)

- (一) なさけ、人の爲ならず、このことを、事實に適合して語れ。

(二) かちふれて、袖に涙の、かゝるとき、人の心の奥ぞ知らるゝ、どの如何なる意味か。

(書取題案) 左の句を適宜の方法により書取らしむべし

- (一) すくひたる人のかすの十万六千人あまりに及びたりと云ふ
- (二) その後凶年ありていつき起りけるに五平治の家のみ其のらんばうを免れけり
- (三) 徳孤ならず必となりあり
- (四) 情の人のためならず

節制

英勝院の家

(例話) 徳川家康の將軍職になりしも、常に澣濯の衣服を着たり、夫人英勝院或る時公に上言していひけるに、公常に澣濯の白衣を服せらる、之を賤婢に洗はるは憚

康公に何ぞ言上せしや

折れ釘に袴をかけしどき家康公の如何せしか

りあり、侍女に濯はしむれば柔軟の手指血を流すに至り甚難色あり、澣衣を服せざるも可なりやと、公之を聞き答へて、婦女の理を解せざる一に此に至るや、我今將軍となり、日々百匹を服するも、倉庫の布帛の飲乏を告ぐることをし、然れども子孫のため衆庶の爲を思ふにより、常に澣衣を着するなりといひけり、又近臣のもの茶亭の袴を穿ち出仕せしかば、公顔色を變へて其の奢侈を誡めけり、嘗一室に入らんとして、折れ釘に袴を掛けたり、公手かゝ之を外し氣を嘘して稜を直されしに、近臣輩之を見て微笑したり、公戒めて吾袴を愛むにあらす、貧しき婦女の辛苦の手に成りしものなまむ、其の勞力を愛するありといへり、之を徳川氏の祖とあす。

(格言) 物ハ、九分よせよ、十分は、こぼると知るべし。(徳川光圀)

(教授要旨)

- (一) 富貴となりて、其のものを忘るまじきこと。
- (二) 克己節制、終生堅く守るべきこと。
- (三) 人慾限りなし、之を節すべきこと。
- (四) 微物と雖、能く愛惜すべきこと。
- (五) 儉約、安靜の基礎なること。

(教授方法)

教授法ハ歸納的に資れ、能く注意して、讀書と混同すべからず。
徳川光圀公の節儉 北條時頼の節制 岡野左内の節約貯蓄 之等を
説話の豫習教材となすべし

(問詞)

- (一) 徳川家康ハ、常に澁濡の衣を着られしハ、何の爲ぞ。
- (二) 家康夫妻の掛問答の大畧を、語るべし。

(三) 家康、折れ釘に袴の掛りし時、如何にせしや、且何事を謂ひしや。

立志

小野道風の能書家となりし談柄を知らずしものあからずし聞かせよ

(例話)

小野道風、或る時書を學びしが己の欲する如く上達せざりければ、大に倦み勞れて庭園を徘徊し鬱を散じけるが、池の邊より來り佇みて水の表面を眺め居たりしが、一疋の蛙ありて、池中より柳の枝の垂下たるに上らんとて、屢飛び附きしも容易に上ること能はざりしかば、道風は最面白きと思ひて餘念なく眺め居たり、然るに其の蛙は飛び上りては落ち落ちては又飛び上り、再三再四の後終に其の枝に飛び附き上ることを得たりしかば、道風は大に感心して、人も亦此の如く屈せず撓まず志を勵

道風は如何

なること
に感して
勉勵
心を
發せし
か

し熱心己まざれば、何事も仕遂ぐる能はざることなりとて、是より志を立て孜孜勉勵し少しも倦み怠るの念なく、其の業に従ひしかば、後には誰とて知らざるものもなき名高き能書家となりて、人々に尊崇を受くることとはなれり、諺に、あまたれ石をうがつ、と夫れ之を謂ふか。

(格言) 巧なるは、其の人の勉強あり。并子

(教授要旨)

- (一) 下手も勉むれば上手とあるべきこと。
- (二) 業の成ると成らざるとは、勉むると強めざるとにあること。
- (三) 精神一たび到れば、何事か成らざることなきこと。
- (四) 賢と愚と分るは、幼時勉學すると、せざるにあること。
- (五) 怠らず勉むれば、何事もならざることなきこと。

(教授方法)

眞壁平四郎の立志 ヲアルレン、ハスサングスの立志 細川忠利の立志を一の誘導教材として、生徒に其の大意を談話せしめ、然る後格言の意解より、漸次事實に説き及ぼし、實行を勸奨すべし。

(問詞)

- (一) 小野道風、書を學びて如何せしや。
- (二) 道風の奮勵せしハ、何を見て、感悟せしや。
- (三) 道風は、後に如何なる人となりしや。
- (四) あまたれ石を穿つ、とは如何なることを云ふぞ。

(應用問詞)

- (一) 小野道風が、蛙の柳波に上るを見て、奮勵せざりせば如何。
- (二) 志あれバ事竟に成る、どの意味を平易に説話せよ。
- (三) 韃靼のテムウルと云へる大將が、敗軍の後蟻の麥粒を運ぶを見て、奮發せし語を知るものあらバ語れ。
- (四) 轉ふ石には苔集らず、とは如何なることをいひしものか。

(書取題案) 左掲の句を適當なる方法により書取をあさしむべし

(一) 人一志を以ちて萬事をなし得べし

(二) 志、つよくひきたて、學ぶべし。

石にたつ矢のためしきくにも。

(三) 滴りも絶えねば石に穴をあけ

(四) 巧なるは其の人の勉強にあり

(五) これよりせいを出して遂に手かきの名をあげたり

攝生

醫者が二疋
の猿を飼は
んとせしは
何故かしは

(例話) 昔或る處に醫者ありけるが、此の人病理を研究せんと欲し、同日に生れし二匹の猿を得て之を飼ひ置きたり、一疋の猿には時を定めずして種々の食物を多量に與へて飽食せしめ、一疋の猿には、時間を定め惡しき物を避

飽食せし猿
は終に如何
がせしか

け、勤めて滋養分ある食物を撰みて程よく食せしめたり、然るに年月を経て、其の結果として顯はれしは、多く食り食せし猿は身体次第に衰弱し、其の動作も不活潑かりしが、之に反し適度に與へられたる猿は、身体壯健にして体重も増加し、活潑に躍々遊戲し顔色も喜ばしけりて無病なりしと云ふ、且瘦せたる猿は終に病みて死したりとぞ、是に於きて醫者も大に發明する所ありしと、されは獸類のみならず人間も亦此の如し、食事は身体の營養をなし、其の健否を爲す大切なものなれば、能く其の物質及分量を吟味し、時を定めて食すべきことこそ、然るに世に身體の貴重なるをも知らず、前の猿の如く夭折するものあり歎すべきかな。

(格言) 胃を寛くして、以ちて氣を養ふ。(蘇軾)

(教授要旨)

- (一) 食物を食するに、時間及分量を定むべきこと。
- (二) 食物の滋養分に富めるものを食すべきこと。
- (三) 身体の貴重なることを知るべきこと。
- (四) 飲食を節すれば、病少なきこと。

(教授方法)

いたきなり、苦き藥に、あつき灸くるしまんより、かねてつゝしめ、養生の飢うることもなく、飽かすして、もの思ひざる、外にあらじな。之等の了解し易き歌詞より、攝生のことを説き起して、歸納的に教授すべし。

(問詞)

- (一) 醫者の二頭の猿を、如何に飼養せしや。
- (二) 時を経過して、二猿に如何なる相逢を、來せしや。
- (三) 醫者の、何を悟りしや。

(四) 天折するに、多く何によるか。

(五) 身体の營養を、なすもの何か。

報恩

彌三郎の君
恩に感せし
何故か

(例話)

梶川彌三郎は織田信長の臣なり、嘗過失ありて罪一處せられんとせしを、信長赦して深く後來を戒めたりしかば、彌三郎は君恩の忝なきに感泣し、其の報効をなさずんばあるべからずと、寸時も忘るゝことおかりし、信長宇治槇嶋を攻めんとせり、時に宇治川暴漲し渡るべき橋なく、水勢甚盛なりけきは、多くの軍勢に唯水面を眺め居りて誰とて先渡するものなく躊躇したり、既にして水音高く飛び入るものあり人々誰ならんと見てあれば、信長鞍掛に立上り彼は梶川なり、何とて猶豫すべきと進軍

信長の何故
に彌三郎に
恩賞を賜ひ
しか

の令を發せしかば、多くの軍勢先を争ひて川を渡りて、横
嶋城を取り圍み瞬間に之を攻め落としける、是全く彌三郎
の君恩に感銘して、忠勇の氣象を現したるに由らずんば
あらざるなり、信長の後厚く彌三郎に恩賞を賜ひりと
云ふ。

(格言) 君子百行の中、恩を報ゆるを以ちて、大なり

とす。(廣徳錄)

(教授要旨)

- (一) 一旦受けたる恩、永久忘却すべからざること。
- (二) 恩に猶借金、の如し、必返却せざるべからざること。
- (三) 百行中、恩を報ずる、大なる善行なること。
- (四) 恩を知らざるもの、禽獸に等しきこと。

(教授方法)

前學年に於きて教授したる、靈帳の報恩の大略より、格言の意解をなさ
しめ、漸次進みて本題に入り、問答的開發敎式により、充分に事實と格言
との意味を會得せしめ、報恩の實踐躬行を庶幾すべし。

(問詞)

- (一) 梶川彌三郎、誰に事へしや、過失ありし時、如何に取扱はれしか。
- (二) 信長の横嶋城を攻めんとせし時、如何なる事に出遭ひしや、彌三郎、
此の時如何せしや。
- (三) 彌三郎、信長より如何されしや。

(書取題案)

- (一) 口く口の口にかんじけり

貞節

(例話) 武藏の國の人秋田重信の女某十六にして、古河侯

原恭胤の禁鋼せられしは何故か

貞女二夫に見えずとは如何

の儒員原恭胤は嫁したり、居るを幾何ならずして身没し、恭胤も病よりて致仕を請ひけれども允さず、爲に數々請ひて己まざりしかば、罪を得て禁鋼せらるゝと一年餘、終に祿を奪はれ籍を削らる、或る時女歸りて父母を省す、其の母切りに離別を勧め、他に再嫁せんことを以ちてせり、女潜然として涙を流し、我が母として此の言あるり、兒を愛せらるゝの深情より發せしと雖、之を聞く、貞女ハ二夫に見えず、と今や夫は兒を棄てず、兒如何ぞ女子の節を忘れて自去るを求むべけんや、且祿あれば嫁し祿を失へば離るゝ不義之より大なるはなら、假令再良嫁し嫁して、身は錦繡を飾り口膏梁に飽くとも、不義の人と爲るゝ忍びんやとて、堅く取りて動かざりき、後恭胤江都に來り

恭胤後に何れに奉仕せしか

幕府に仕へたれば、父母も先に女を勸めたる言の誤りしを知れり、女は堅く貞操を守り、其の夫に事ふるや益愼み、夫の世を終るまで廿八年の間終始一日の如く、其の姑に侍するや孝養具に至れり、故に其の生む所の子も亦學に深く、後に厚祿を受け家の富有なると父祖の時に超えたと云ふ。

(格言) 婦は、夫を敬ひて、和順なるべし。(大和俗訓)
(教授要旨)

- (一) 貞女は、二夫に見えざること。
- (二) 婦は、夫に従ひて和順なるべきこと。
- (三) 不義の人となるべからざること。
- (四) 婦徳の第一に位するものは、貞操たること。

(教授方法)

妻は其の夫を輔佐すべきこと 妻は其の夫の家産に適する生活をあすべきこと 家事の整頓は妻の重要な責任なること 妻は嫉妬の心を懐くべからざること 舅姑は勿論其の夫に能く事ふべきこと 従順は婦徳の最肝要なるものあること 之等を教授すべし。

(問詞)

(一) 原恭胤は何國の人にして何を業とせしや、且禁錮されしは、何故ありや。
(二) 恭胤の妻生みの親に何如あることを、勧められしや、其の時、妻は何と答へしや。

(三) 後恭胤は、如何になりしや、婦徳を守る幾年の久しきに至りしや。
(四) 姑に事ふるは、如何とせしや、且其の子女は、如何になりしか。

(應用問詞)

(一) 人はみゆより心がら、との意を語れ。
(二) 夫に曲事あらば妻たるもの如何にして、之を諫むべきか。

(書取題案)

- (三) 夫若不幸にして産業を失ふことあらば、妻たるものは、如何すべきぞ。
- (四) 夫に従順ならざる妻ありとせば、汝等之を如何に感ずるか。
- (一) 婦は夫を敬ひて和順なるべし
- (二) 祿あれば嫁し祿を失へば去ること不義之より大なるはなし
- (三) つつしみて婦たるの道をつくしけり
- (四) 夫は我をすてざる、我あに女の節を忘れてりべつを求むべけんや
- (五) 氣にいらぬ風もあらふ、柳かな。

勉強

(例話) 長窪赤水の水戸赤濱村の人なり、源兵衛と稱す、幼にして、學を好み、然れども家固より貧にして、油を買ふの金錢にも乏しかりけり、故に其の學問をあすに當りてや、夜、線香を焚きて燈に代へて讀書に耽りたり、能く其の

赤水の貧困なるに如何

にして書を
讀みしや

赤水何故に
松日亭寄題
の詩を弘く
求めしや

業を勵み勉めしかば、長ずるに及びて群書百家に涉り、みな其の蘊奥を極めたり、遂に大儒となり、水戸侯の侍讀となりて江都あり、屢上言して君侯の容るる所となり、藩政を釐革すること少からず、常に好みて他の儒士に交り又善く後進子弟を誘掖す、藩の制致仕せば其子庶子に列せらるゝ法なきとも、辭して赤濱村の郷士となる、君侯嘗て駕を其の赤濱村の松日亭に枉け、家屬子弟に謁を賜ふ、赤水大に之を榮とし、松日亭寄題の詩を四方に請ひて多く之を集む、赤水最地理學に長ず、和漢輿地圖及地理志數種を著す、みか我が國以前にあらざる所なり、其の他著書數十種ありと云ふ。

(格言) 勉強して學問すれば、聞見博くして、智益明

かり。(董仲舒)

(教授要旨)

- (一) 學問は、勉強によりて成るべきこと。
- (二) 艱難は、汝を玉にせしむること。
- (三) 刻苦勤學の功を、積むべきこと。
- (四) 見聞博ければ、智益明になること。

(教授方法)

いたづらに遊ぶ月日、一字づゝ、まなべ千千の寶とぞなる。精出せば、こはる間もなし、水車。之等の俗解より、撓みなく勉強すれば、如何なる難事と雖、成し遂げらるべきことより、赤水勉強刻苦の談に、説き入るべし。

(問詞)

- (一) 長窪赤水、何國の人にして、何を業とせしや。

秀忠公は誰
の幾子なり
や

- (二) 赤水の誰よ仕へしや、何の功ありしぞ。
- (三) 赤水の君侯より何如なる待遇を蒙りしや。
- (四) 著書の何々なるか。

(書取題案)

- (一) □□シテ□□スレバ□□ヒロクシテ□マスマス□ナリ

謹 慎

(例話) 二代將軍徳川秀忠は家康の第三子なり、性至孝恭儉、謹慎にして、政治に精勵し、賢を貴び、學を好む。秀忠五十歳に及べる頃、病の爲に寝ぬること數旬、未敢一朝も梳髪を廢せず、吾病むと雖、天下の政は敬して之を聽かざるべからず、故に蓬頭垢面にして、之に接すべきものならんやといへり。藤堂高虎、嘗秀忠に少一休息して樂を取り、老苦

古人の語と
は如何

を慰すべしと勸めたり。秀忠答へて、人恒言ふあり、浮世の夢の如し、寸外は皆暗黒なり、何を時と及びて娛樂せざらんや、と此の言大に謬まるものと謂ふべし。浮世既に短ければ、益敬愛せざるべからず、敬愛すべきの時亦長からざるなり。豈勤勉せざるべけんや、予は今將軍の職にあれば、決して安を偷み、娛樂すべき時にあらず、古人の語に、民具に爾を見る、と云ふことあり、身を終るまで拳々服膺して、違はざらんことを欲すと云へりしとぞ。

(格言) 欽めば、身修り、庶事康し。(貝原益軒)

(教授要旨)

- (一) 戒め慎めば、過少なきこと。
- (二) 謹慎なれば、人より愛重せらるゝこと。

- (三) 謹めば、身修りて、諸事安泰なること。
(四) 我が職務に、敬して聽くべきこと。

(教授法方)

前々學年より授け來りし、王陽明の謹愼程皓の謹愼、源師頼の謹愼、林友直の謹愼、又つぎ、四五の生徒をして、其の概要を説話せしめ、終りて教師格言の解釋より、漸次事實に説き及ぼし、演繹的に教授すべし。

(問詞)

- (一) 徳川秀忠の性質は、如何。
(二) 秀忠、老年に及び、一日も朝を廢せしことなきは、何故なるか。
(三) 藤堂高虎は、何を秀忠に言上せしや、且其の時、秀忠の答辭は、如何。

(書取題案)

- (一) 事□マザルハ□レヲ□ルノ□ナリ
(二) □□ハ□ノヒトリ○ツツシ○
(三) ツツシメバ□□リ□□ヤスシ

忍耐

良齋先生の
幼時如何

良齋の名聲
高かりしは
何故と思ふ
ぞ

(例話)

安積良齋は、通稱を祐助と云ひ、奥州二本松の人なり。幼にして學を好み、穎異として奇才あり、慨然として奮ひて曰、山間僻邑、良師善友乏しと、十七歳の時、江戸に來り、佐藤一齋の門に入り、業を受く。良齋の家固より貧しく、學資給せず、因りて一齋に請ひて薪水の業に服し、以ちて大學。時、筆紙墨を購求することも容易ならず、爲に漸反古紙を買ひ、其の裏に書き記して之を讀み、困苦勉強して、毫も挫屈するの色なし、遂に祭酒林述齋の門に入り、其の究を忍び、其の業に精勵せしかば、學大に進み、名聲鬱然として都下に震ふ。良齋嘗良齋問話正續四卷を著す、議論正確として問話の類にあらず、良齋文章詩名を以ちて鳴

る、天保の末幕府令を下して學政を振興す、是に於て諸藩風靡し絃誦の聲殆天下に遍し、二本松藩も亦學館を起し、艮齋を擧げて以ちて教授となす、既に於て將軍召して謁を賜ひ、幾何もなくして特旨擢めて昌平校の教官となす、人以ちて異數となす、晩年、學深く文精に、卓乎として後進に仰れ、書を挾みて踵るもの陸續として門に盈ち、列侯以下相延きて講經に招かれ殆虚日なり、著書數十種あり、艮齋の大儒となりしを、皆其の忍耐の念深きに依るなり。

(格言) 士の事を成す、多くは窮苦の日あり。(之續進)
(教授要旨)

(一) 何事をなすも、耐へ忍ぶの志なかるべからざることを。

(二) 艱難苦學の我々をして大器を成就せしむること。

(三) 究苦に打ち勝つ、忍耐の念なりとのこと。

(教授方法)

心棒のかねあり。石の上にも三年。などいへる喩言より説き起して、忍耐の解釋をなし、事實を詳明に講話し、格言に歸結すべし、然る後席順に拘らず生徒を指名して、讀み且講話せしめて、全般の生徒に涉るべし。

(問詞)

(一) 安積艮齋の、何國の人にして、其の幼時の志尙如何。

(二) 何歳の時江都に來りしや、誰を師として、學びしや。

(三) 一齋の塾にありしときの有様は、如何。

(四) 艮齋の後誰を師として、學び誰々に仕へて、鴻儒の名を擧げしや。

(應用問詞)

(一) 必忍ぶことあれば、其乃濟すことあり、どの意解をなせ。

(二) 苦を以ちて、樂とすれば成効身に從ふ、どの如何なる意か。

(三) 石の上にも三年、どの如何。

(書取題案)

- (一) □き□より□く□□を□みけれバ□□□にて□□に□でけり
- (二) しかるにまづしくして□□をも□めかねあらふところを□きとむるにも□□□を□ふるはどなりし
- (三) □ノ□チ□ス□クハ○○□ノ□ニアリ

容儀

梶定良の人
となりを問ふ

(例話) 梶定良ハ徳川幕府の麾下に臣なり、累進して従四位下ニ叙せらる、寛永正保の頃、忠誠懇謹を以ちて名あり、將軍家光常ニ左右ニ侍せしむ、後庭ニ在りと雖亦必従ふ、家光薨す遺命して下野國日光山ニ葬らしむ、定良柩ニ従ひ遂ニ留りて居を茲ニ定む、是より四十七年の間毎日廟

梶定良は常
に何と云ひ
居りしや

を拜し寒暑風雨を以ちて廢することなし、鷄鳴に起きて沐浴戒潔し、味爽として廟ニ詣り獨殿前ニ肅坐し、尊崇敬禮すること生ニ事ふるが如し、凜風凍雪の中、或体仆れ口噤するニ至ることあり、年八十五にして頗行歩ニ難む、始めて輦を用ひて往還す、然れども廟門に入るニ未杖つかず、必徒歩せり、定良常ニ言ふ、身君恩を蒙りて骨ニ銘し髓ニ徹す、老ゆると雖日に廟に侍するハ、是以ちて素志を償ふべきのみと、元祿十一年病みて卒す、年八十七、幕府命じて家光の塋域の後に葬らしむと云ふ。

(格言) 廟を過ぐれば、則趨る。(漢書)

(教授要旨)

(一) 人たる所以の禮あるを以ちてなりとのこと。

- (二) 死に事ふること、生に事ふるが如くすべきこと。
- (三) 人を敬するの、自敬するより始まること。
- (四) 身を慎み、行儀を正しくすべきこと。
- (五) 假にも不行儀の体をなすべからず、人の見ざる所の、猶深く慎むべきこと。

(教授方法)

發問に於きては、次の諸點に注意すべし。最初に問題を、全級に對して發し、而して後生徒を指名して答へしむべし。簡易なる反覆問題の劣等の生徒を指名し、稍難解ある開發問題に對しては、優等の生徒を指名すべし。答辨の爲に生徒を指名するに當り、席順に依らずして、全級に渉るべし。

(問詞)

- (一) 梶良定は、誰の臣にして、其の行爲は如何。
- (二) 廟に至る時、老年に及びて如何せしや。

- (三) 卒後、何處に葬られしや。
- (四) 廟を過ぐれば、則趨るといふ、何の謂ひぞや。

謙 遜

良繩の幼時
如何

(例話)

春澄良繩の幼にして敏慧人、勝れ骨格非凡なり、祖財厝父豊雄之を奇とし意を加へて撫育し、産を傾けて惜む處なく、文字を習はせしが、良繩日夜勉勵して手に書卷を釋かず、閱覽する處多く口誦す、長するに及びて博聞強識にして、恭謙遜讓の譽高く、淳和、仁明、文德、清和の四朝は、歴事し、高官に登りけれども、謹愼質朴にして、苟己の長所を以ちて人を凌ぐの心なく、常に謙遜退讓して己知らざるものの如し、當時にありて有名の南淵年、名大江音人等皆年長を以ちて其の下にあり、良繩人に語りて、南江兩

四朝とは如何

良繩の人に

氏の如きは、或碩學老成、或朝家の塩梅なり、吾年少劣才を以ちて其上にあれば、出入する毎に心は愧づといへり又文章博士たりし時、諸の博士等、互に黨派を以ちて相輕蔑し短長口は絶たず、弟子も亦門戸を立て己を是とし人を非として、常に爭論の絶ゆる間なかりしかば、人の誹り世の嘲り止むをなかりけり良繩恬退して門徒を謝遣し、終に謗議の及ぶなく、美名を天下に失はざりしと云ふ。

(格言) 満ハ損を招き、謙ハ益を受く。(易經)

(教授要旨)

- (一) 己の長所を以ちて、人を凌ぐべからざること。
- (二) 人に接するには、驕傲尊大なるべからざること。
- (三) 敬以ちて己を持ち、謙以ちて人に接すべきこと。

(四) 己を是とし、人を非とするは甚惡しきことなりとのこと。

(教授方法)

謙遜は、動もすれば卑屈に陥り易く、恰活潑の粗糲も流るゝが如し、故に能く注意して、謙遜の美德なること、卑屈の敗徳たることより、徐に事實を講話し了りて、格言の意解をなして之に歸結すべし。

(問詞)

- (一) 春澄良繩の幼時の有様を語れ。
- (二) 四朝に歴仕して、高官に上りし時の、行爲如何。
- (三) 常に、如何なることを、云ひ居りしや。
- (四) 當時文學の士の有様を、述べよ。
- (五) 良繩の令名を、天下に擅みせしは、何によれるか。
- (六) 謙遜とい如何。

(應用問詞)

- (一) あたまだす釘はたゝかるゝ、とい如何なる意味か。

- (二) 自滿てりとするものは、敗るとの意味を語れ。
(三) 常に人に謙りて、吾が身を誇るべからずといへることを意解せよ。

(書取案題)

- (一) 傲慢馬鹿のうち
もとが心のくらきゆゑなり。
(二) 傲慢の、あかりふらつく鼻のさき。
(三) 満は損を招き謙は益を受く
(四) 日夜べんきやうして手に書卷をはなすことなかりけり
(五) 己の長所を以ちて人を凌ぐ心なく常にへりくだりて知らざるもの
の如くなりき

守分

肥後の熊本城の建築せしものなりや

(例話) 加藤清正封を肥後へ受け彼の有名ある熊本城を建築するの時、當り、自其の普請を監督指揮せり、或る日

當時魚肉の得難き何故ぞ

多くの役夫の晝飯を爲す處を通行せし、一人の年老いたる役夫ありて、魚肉を菜として食事爲すを目撃したれば、足を止めて老人に其の年を問ひし、七十歳なりと答へたり、よりて清正の老人に向ひ、汝何故に其の様ある美味のものを食するや、此の如き賤役に就き居るに此の如き驕侈をなすや、今を以ちて推し量れば、汝少壯の時より心懸惡しきものならん、如何にとなれば斯の老年に及びても、尙人足に出づる不幸を免れざるなり、と深く後來を戒めたり、此の頃、戦國時代おきは容易に魚を食し難き、賤しき身分にありながら奢りをなし魚類を食するなれば、清正の言に實に理ありといふべし、身を立てんと欲せば、須臾らく驕奢を去り、其の分に安すべきこ

を肝要なれ。

(格言) 分に安じ、以ちて福を養ふ。(蘇林)

(教授要旨)

- (一) 人は能く其の身分を守るべきこと。
- (二) 分に過ぎなば、永久其の家を興すことあたはざること。
- (三) 窮奢を極むれば、家乍破るべきこと。
- (四) 其の分に安じ、奢侈に流るゝことなく、福を求むべきこと。

(教授方法)

前學年に於きて教授したる松平信綱の守分を基礎とし、身分の尊卑貧富を問はず、其分限に應じて衣食住ともに節制を加ふべきことの必用より、本課事實と對照して、以ちて分は過ぐるの惡しきことを懇諭すべし。

(問詞)

賴宣の人となり如何

- (一) 加藤清正、熊本城普請の時、如何なることを目撃せしや。
- (二) 賤夫と諭せし清正の言は、如何。
- (三) 其の分に安ずるとは、何の事なるか。
- (四) 身分不相應なるは、後には何となるぞ。

(書取題案)

(一) ロ ム ロ マ ロ ナ ラ ム ム ナ ヤ シ ナ ヅ

惜陰

(例話) 徳川賴宣は徳川家康の第十一子として紀州家の祖なり、賴宣性豪邁にして智略あり、家康之を鐘愛する。と他子より超ゆ、十三歳のにして始めて軍に従ふ、明年大阪夏の役、兄義直と二條城に軍議あり、其の先鋒たらんことを請ふ許さずして後拒となる、戦終りて賴宣茶臼山に

賴宣の怒聲
を極せし
何故か

登りて家康は謁せり、時、家康胡床に據り、之を撫して、曰
惜むらくは汝捕獲の功なきを、賴宣涕泣して曰、大人兒
を後軍に置きたり、故に事に及ばざらむ、悔ゆるとても
何ぞ及ばんと、松平信綱はあり之を聞きて曰、君尙妙
齡にして前途遼遠なり、故に功を建つる何れぞ今日に限
らんと、賴宣聲を勵じ、汝何をか云ふ、願ふに吾復十四歳あ
るやと、家康之を慰めて曰、汝の此の言首功に當ると爲し
賴宣色釋くを得たりと云ふ。

(格言) 光陰に、關守なし。(註)

(教授要旨)

- (一) 月日の一旦過ぐれば、再來らざることを。
- (二) 光陰を愛惜すべきことを。

(三) 空しく、消光すべからざることを。

(四) 少壯の年は、再なきことを。

(教授方法)

春みつき、いつの間にやら、吳竹の、

藪蚊ととも、夏は來にけり。

之等の平易なる歌の意味より説き起して、以ちて事實に入り、格言に歸
結して、光陰の空過すべからざることを、銘肝せしむべし。

(問詞)

- (一) 徳川賴宣は、誰の子にして、後何國に封せられしや。
- (二) 大坂夏の役のとき何歳なりしや、何を言上せしや。
- (三) 役後家康に謁せしとき、父子の問答は如何。
- (四) 松平信綱は、何と言ひしや。
- (五) 其の時賴宣は、何と云ひしぞ。
- (六) 家康は、何を以ちて賴宣を慰めしや。

(書取題案)

(一) □□ = 〇〇〇〇〇ナ

節 儉

(例話)

ヘロザアトンの英吉利國の人なり、其れ幼き時ハ家甚貧困なりしが故に、或る工場の下稚となりて、其の職業を勵み勉めけるが、天性篤實にして、百事悉節儉を旨とし、無用の費を省きしかば、長するに及びて富有の身代となり、遂に代議士に撰舉せらるるに至れり、今ハ何不足なき豊かなる財産家とありしも、萬事儉素を守り、徒費を省きしより益富有の身とかれり、ヘロザアトン常といひけるは、吾が富めるは吾が産業の富めるにあらずして、吾が需用の小なるに由るなりと、節儉の要道は、小利に意を注

ヘロザアト
ンが富有の
身となりし
原由は如何

ヘロザアト
ンが財産家
となりし後
は如何

がんよりは、小費を省くゝあるなりと、信し旨ある言あるかな。

(格言) 篤實質素なるは、富榮の本なり。(紀徳民)

(教授要旨)

- (一) 小利を得るより、小費を省くべきこと。
- (二) 儉約なるものは、終に富榮となること。
- (三) 其の分を守り、質素を務むべきこと。
- (四) 富有となるは、無用の費を省くにあること。

(教授方法)

前學年にて既に教授したる、徳川光圀公の節儉、北條時頼の節制を引例し、能く節儉の美德にして、一身一家を興すに缺くべからざることより、事實の詳細に説き及ばし、以ちて格言を収結し、其の實踐躬行を勸誘すべし。

(問詞)

- (一) ベロザアトンの何國の人にして、其の生活の度、如何なりしや。
- (二) 代議士となり、富有の身となりし、何によるか。
- (三) 常に、如何なることに意を注ぎ、何を移めしや。
- (四) 質素なるもの、後より如何なる結果を生ぜしむるぞ。

(應用問詞)

- (一) 節儉と吝嗇との區別を、明答せよ。
- (二) 克く家に儉す、どの如何。
- (四) 奢り長し易し、慎むべし、どの意解をなせ。

武勇

(例話) 菊池武光は武時の第八子なり、長兄武重の子武士早く家務を辭し僧となるを以ちて、武光職を襲ぎ肥後守

武光の武勇
は如何

武光の太刀
洗石は何地
に存するか

に任せられ、又肥前守となる、父兄の訓に遵ひて心を王室に竭す、特に武勇にして萬夫無當と稱せらる、後醍醐天皇の時足利尊氏謀叛せし時、小貳頼尙豊後の大友氏時等相俱に叛き王師に抗せしかば、武光大に怒り征西大將軍懷良親王奉じて、八千騎を將とし筑後に入りて、六万余騎と筑後川を夾みて對陣せり、時に賊の官軍の小勢なるを見て大に侮り、唯一撃の下に討ち敗らんとせり、武光之を察し衆を勵して曰、勝敗の決は多少にあらずして人の和するにあり、且逆を以ちて順し敵す、其の鋒さきの鈍く大將の心に恐怖を懷くこと明なまば、敗れんこと火を観るが如しとて大軍と戦ひ大勝を得たりと云ふ、今に至るまで筑後川に武光太刀洗石の舊跡を留め、武勇の譽れを干

載の下に遺したり。

(格言) ちよろづの軍なりとも、千早振、人をふぶさ

で、あにかへらめや。(平家物語)

(教授要旨)

- (一) 人の臣となりては、忠義の心なかるべからざること。
- (二) 人は常に義勇の心を養成せざるべからざること。
- (三) 一旦緩急あらば、義勇以ちて公に奉すべきこと。
- (四) 武勇の譽を千歳に遺すべきこと。

(教授方法)

敵を千里に逐ひ退けて、寂慮を安じ奉れ、といへる歌詞を引き以ちて、武光の武勇にして、王家の爲に勤勞せし事實を談説して、生徒をして同感の情を發起せしめ、然る後格言として掲げたるどころの歌詞の意味を平易に説き去りて之に収結せよ。

(問詞)

- (一) 菊地武光は誰の子にして何國に居りしや、且其の時帝王の名を問ふ。
- (二) 尊氏の謀反せしとき、王に勤め賊と何所に於きて合戦せしや。
- (三) 軍勢を勵せしときの言語は、如何。
- (四) 賊軍と戦ひ、如何せしや。

(應用問詞)

- (一) 勅語に宣ひし、義勇公に奉ず、との意義を釋け。
- (二) 國民、武勇の氣象に乏しきも、依然國家を維持し得べきか、如何。
- (三) 日本國の威光を耀さん、に國民たるもの常に如何なることを務むべきや。

(書取題案)

左記の句を、平假名交りと片假名交りとにて書取らしむべし。

- (一) 賊の武光の兵少きを侮りけり

喜岐は何を
己の任とせ
しや

- (二) 味方をはげまし軍の多少によるべからず
- (三) 彼の逆よして我の願なり
- (四) おそるるに足らずと下知しつゝ遂にてきの大軍にうちかちたり
- (五) 千萬の軍なりとも千早振
- 人をあささで、あにかへらめや、
- (六) 御國の民たらんもの常に武勇の氣象と剛毅の心志とを養ふべし

節義

(例話) 松平忠直の老臣杉田壹岐、微賤より用ひられて厚祿を賜ひ國老に列じけり、常に直諫して主君の過失を匡正すること、を以ちて己の務とせり、或る時忠直國に在りて鷹を放ち夕暮に及びて城に歸りけきは、家老等出で迎へしに、忠直色麗しく今日労働の狀を以ちてすきは、萬一

人を壹岐を
何とて氣づ
かひしな

の事ありて出陣するも敗を取ることをなしと、家老等之を聽き大に慶事なりと答へたり、壹岐末座に在りて沈黙し居たりしが、唯今の命に實に歎すべきことなり、其の理由に、近頃鷹狩に従ふ時の御手討に逢はんも計り難しとて妻子に訣別するとのことなり、君を疏する此の如き時の萬一の時に用に立つべからず、生きて御家運の衰ふるを見んよりは寧死するに如かずとて、直諫大に其の怒を冒したり、人々壹岐は罪を免まじきとて氣遣ひたり、然るに壹岐は泰然として曰、吾微賤より起り今に重き家老の役を奉ずるに至れり、主公の厚恩を受くること特に深し死にあらざるに以ちて報すること能はずとて、家老歸りて命を待ち節を守りて少しも怖るゝ色なかりしが、前田

侯其の夜召して其の忠言を褒めらるゝ親佩刀を賜りしと云ふ。

(格言) 内に省みて、疚しからずば、何をか憂ひ、何をか懼れん。(論語)

(教授要旨)

- (一) 君の爲より、身命を惜まざること。
- (二) 君の過を見て、直諫して正すべきこと。
- (三) 恩を受けて、報ずることなくして、可ならんやとのこと。
- (四) 士に節義の心なかるべからざること。

(教授方法)

小宮山友信の節義 鳥井強右衛門勝高の節義 藤堂高虎の節義 等の大畧を、生徒に説話せしめ、然る後教師節義の何物たることを解明して、漸進みて事實と格言との意義を詳細に講述すべし。

(問詞)

- (一) 杉田壹岐に、誰に事へて何を務めしや。
- (二) 壹岐に、常より何を以ちて己の任とせしや。
- (三) 鷹狩の時諸老臣の廢せしは、獨直諫せし何よりか。
- (四) 壹岐の泰然として、恐るゝ色なき何よりぞ。
- (五) 前田侯の其の諫を入れし何の意ぞ。

(應用問詞)

- (一) 直言諫争の功に一番鎗を勝るゝ如何ある義か。
- (二) 能く人を容るゝものは大器なり、このことを事實に照合して、其の意味を説明すべし。

(三) 良薬口に苦く諫言耳に逆ふ、如何なることを言ひしものぞ。

(書取題案)

- (一) 〇る□□□が□にふけるを□て□をいさめ□にその□を□しけり
- (二) 前田侯〇□の□□を□し□りて□□をはめしやうしけり

(三) □ニ□ミテ□シカラズバ□チカ〇〇〇□チカ〇〇〇

習慣

(例話) 宋の呂希哲少あるとき、其の母希哲を愛すと雖之に訓へて規矩にいたがため、初寒暑日に侍立すること終日にして、之に座することを許さざれば敢座せず、又日々必冠帶して長者に見ゆ、平常酷暑の日と雖、父母長者の側にあそばさば衣服を脱ぎ襪を去ることを許さず、又外に出でたるとき、途次は於きて茶肆酒店に入りて憩ふことを許可せず、其の他不正の行をなさざりしかば、長ずるに及び、徳器成りて大に人を超えて尊崇を受けると云ふ。

(格言) 人の宜しく謹むきは、慣習に在り。(紀徳民)

(教授要旨)

呂希哲が外
出せしとき
は如何

- (一) 人の正しき務むべきは、慣習なること。
- (二) 習慣は、第二の天性となるべきこと。
- (三) 善良の慣習を養成すべきこと。
- (四) 悪しき慣習は、除去すべきこと。

(教授方法)

學校にあるときも家ゝ居るときも、坐作進退は勿論、衣服の着方食事のしかたなど、總べて善良方正なる習慣を得べきやう注意すべきことより、一度悪しき習慣を得ば、之を改むるに、最苦難なることを、事實を添へて講話すべし。

(問詞)

- (一) 呂希哲は、母の教訓を、如何せしや。
- (二) 母は、如何なることを命ぜしや。
- (三) 呂希哲は、成人の時、如何なる人となりしや。
- (四) 人より崇敬を受くるは、何によるか。

(應用問詞)

- (一) 孟軻のことを語れ。
- (二) ロフト、ピールのことを話せ。
- (三) 平生指の爪を、齒にてかみさる癖ある生徒あり、斯の如きは、善良の習慣とすべきや、否や。

(書取題案) 左の句を書取らしむべし

- (一) 人の宜しく慎むべきは慣習にあり
- (二) 習慣は第二の天性なり
- (三) 人の善惡は誠に近習よる
- (四) 麻よつるる蓬

勉強

(例話) 山鹿素行ハ兵學者なり、奥州會津の人、其の先の東

素行ハ其の師が孫子を講ずるを聞き、感ぜしや

武術の蘊奥を得しハ何や歳の時なり

肥の山鹿一居る由りて以ちて氏とす、父玄庵醫を江都に業とす、素行生れて穎悟なり、九歳にして林羅山の門に入り、十一歳にして小學、論語、貞觀政要等を講説す、殆老成の人れ如し、十二歳れとき其の師が孫子を講ずるを聞き、兵法の要用なることを悟りけり、十八歳にして北條氏長に従ひ大に韜畧を學ぶ、居ること五年諸弟子其の上に出づるものなり、二十二歳にして氏長悉秘訣を傳授を、是より文武兼習名教を以ちて自任す、武學を以ちて行る年未三十ならずして名聲籍甚なり、將軍家光其の名を聞き徵傭するの意あり、未及ぼすして薨す、赤穂侯淺野長直雅に素行に就きて武學を問ひ、親弟子の禮を執る、是に於きて禮を厚くして之を聘し、祿千石を給す、居ると九年致仕す、而

素行の性質
を言へ

して赤穂侯敬禮愈渥し、是れ時より當り素行の聲望益貴く、上諸侯幕府麾下の士より、以下藩々の士太夫、閭閻の處士に至る迄争ひて其の門に入る、家頗富饒にして、五六千石のものと雖之に抗すること能はず、素行性英邁にして博覽強記なり、殊に兵學に精しく、後に兵學の大家となり、山鹿流と云へる一派の兵學を起したり、侯大に優待し死するまで更らず、著書甚多しと云ふ。

(格言) 強めざれば達せず、勞せざれば功なし。(孔子家語)

(教授要旨)

- (一) 幼時、能く學業を勉勵すべきこと。
- (二) 賢となり愚となり、人より敬せられ敬せられざるは、少壯の時、學ぶと學ばざるとにあること。

(三) 勉強すれば、何事もならざることなきこと。

(四) 人より尊敬せらるるは、勉強の結果たること。

(教授方法)

勤めても、又勉めても、強めても、

つとめたらぬは、つとめなりけり。

之等の了解し易き嘉言歌詞等を以ちて、萬事勉強にあらざれば、成し遂ぐる能はざることより、事實の説明に移り、格言を歸納すべし。

(問詞)

- (一) 山鹿素行は、何國の人として、幼時の有様は如何。
- (二) 誰に従ひて、兵學を修め、兵學者となりしや。
- (三) 素行は、誰に仕へしや、其の待遇は如何。
- (四) 山鹿流を始めしは、誰なるぞ。
- (五) 素行の文學は、如何。

(應用問詞)

(一) 前回の試験にて、汝等の中は、席順の上りしものと下りしものとあり、此の結果は、何によれるか。

(二) 精出せば、こほる間もなし、水車とは如何なることを、いひしものぞ。

(三) 利運は勉強の結果といへる西諺あり、其の意如何。

(書取題案)

(一) □□の□□となり□□□と□へる□□の□□をおこしけり

(二) 強○○○○達○○○○功○○

(三) 兵法○○○○○○人○○

改過

(例言) 三代の執權職北條泰時の時、訴訟ありて原被両造相争ひて下らず、或る時訴庭を開き、原告人と被告人と對決して其公事を聽き居たり、然るに一方の相手方へ急に

一方の相手方へ急に頭を下しや

何故に泰時は褒美を與へたりしや

頭を下けていひけるは、唯今まで吾が方へ道理あると信じ固く取りて、動かざりしが能く考察を下すに、反りて此の方の無理なることを知り得たり、如何に争ふことを得ん、宜しく判決を給へといへり、其の時泰時は靜まいへらく、此の訴訟は、汝が考ふるか如く眞公事なり、由りて後へ相當の判決を下すべし、然きとも今まで數多の公事を聽き判決を與へしが、汝の如く自其の非なることを曉りて、枉けて無理を言はざるは始めてあり、汝の過を悔い善に遷るを嘉みすと、反りて厚き褒美を與へしと云ふ、凡べて己の惡しき事を知りたらば、直に過を悔い善に遷り善人とならざることを。

(格言) 過ちて改めざる、之を過といふ。(論語)

(教授要旨)

- (一) 過を改むるより善きなきこと。
- (二) 常に廉耻の心あるべきこと。
- (三) 過を悔いて善に遷るべきこと。
- (四) 一旦過を悟りたらば、再すべからざることを。

(教授方法)

人誰か過なからん、唯一念發起して、己が非を改むれば、今日よりして善き人なり。(六義)過ちて改むるに憚ること勿れ。(語論)等を平易に説述して、事實に入り格言に收結し、以ちて改過遷善の美德を、實行せんことを勸むべし。

(問詞)

- (一) 北條泰時の時、原被両造の訴訟の如何
- (二) 訟廷に於きて、如何なることが起りしや。
- (三) 泰時、其の非を悟りしものを、如何に處し何と云ひしや。

(四) 過失とい、如何なる事なるや。

(書取題案)

- (一) 負けてのく、人をよわしと思ふなよ、
智恵の力の強きゆゑなり。

正直

(例話)

亞米利加洲合衆國のニューヨークといふ處に、アダム、ハンスと云ふ二人の大工ありたり、二人の性行は大に反せり、アダムの常に善く其の職を勵みて善行甚多し、之に反し、ハンスは常に業を怠りて行狀も正しからざりける、ハンスはアダムの勉強を嫉みて、數世間に惡評を言ひふらし、且大工道具を陰に毀つ等のことをせしめ、アダム少しも意に留めずして、益其の業に勤勉したり、其の後、ハ

アダムの人
とありは如
何ぞハンス
ハンスはア
ダムの爲に
如何なるこ
とをなしし
ぞ

ハンスは何
事を愧ぢた
りや

ハンスは火災に罹り家財悉く有に歸し、箸一本も所持せぬ不幸の身となりて、實に憐むべきの境遇に際會せり、アダムハ平生の事は少しも念慮し掛けずして、速に馳せ行き音訪れて兄の困難察するに餘りあり、先此等の器具を呈せん、明朝より我が得意場に行きて、直に其の業に就くべしと、最も懇篤に世話をなして大工道具の諸品を分ち與へたり、是に於きてハンスは前日の惡念を愧ぢて、涙を流して其の手を取り厚く禮を述べ、深くアダムを敬ひ尊びて其の後無二の交をなせしと云ふ。

(格言) 人曲を以ちてするも、我は、直を以ちてす。(徳川齊昭)

(教授要旨)

(一) 行為は常に正直ならざるべからざること。

(二) 誠意眞實を以ちて、人々交るべきこと。

(三) 人々に加ふるは曲を以ちてするも、我は直を以ちてすべきこと。

(四) 正直の行は、人をして善に化せしめ得ること。

(教授方法)

温順は愛敬の母、といへることの俗解より、漸進みて事實に移り、種々の發問をなしつゝ、説き了りて、格言の解釋をなし、猶左の道歌を以ちて、之に収むべし。

憎むども、憎みかへすな、憎まれて、

憎み憎まれは、てしなれば。

(問詞)

(一) 亞米利加ニユーヨーク府の、二少年の性行を述べよ。

(二) 惡少年火災に罹りしとき、善少年は何を以ちてせしや。

(三) 惡少年は、後に如何なる人と化ししや。

忍耐

高宗皇帝の
何依張公
藝の家に臨
幸せしぞ

(例話) 唐の高宗皇帝、或る時天下を巡遊して、壽長と云ふ處に至り給ひしに、此の地に張公藝といふ人ありけるが、九代の間家を分たずして、祖孫父子、兄弟、姉妹、伯叔等の大勢の男女、家を分たず一戸の内に住みしかども、皆いたりて中睦しく和合し、少しも互に争ふことなかりき、此の事上聞に達しければ、高宗皇帝其の宅へ臨幸ありて、張公藝を召し問ひけるは、斯る大勢の家族を治めて、斯く風波なく静ならしむること、如何なる方便のあること、にや、奏問せよとの詔ありしに、張公藝は何の詞もなく、筆を採りて忍々々々と百餘字を書きて奉りける、其の意は家族の協はざるは、長幼尊卑の間、或衣食の足らざること

あり、或禮節の備らざることありて、互に相責め相怨むより、遂に乖き争ふものなきは、苟相與に忍耐するに於きて何の協はざることのあらんやと、帝を始め多くの人々實もと感稱し、厚く其の一族に物を賜りしと云ふ。

(格言) 忍の一字は、衆妙の門なり。(密語)

(教授要旨)

- (一) 忍耐は、衆妙の門なること。
- (二) 忍耐は、一家にありては、族人を和熟せしむること。
- (三) 一家にありて、互に相責め相怨むことなかるべきこと。

(教授方法)

先生徒をして讀み且講話せしめ、然る後教師一家族の關係より、張公藝の一家族和睦せしことから説き及ぼし、是相互に我儘を言はず、相互に忍を旨とせしよることを剴切に説述して、格言に歸着すべし。

(問詞)

- (一) 張公藝の家、高宗皇帝の臨幸ありしに、何の爲なるぞ。
- (二) 公藝忍の字、一百餘を書きて奉りしに、何の意なるか。
- (三) 厚く、其の一族に物を賜りしに、何によるか。

遵法

(例話)

大岡忠相は徳川幕府の臣あり、正徳二年山田奉行となりて、從五位下能登守に叙爵せしが、山田に赴きし時、訟獄の延滞せしもの多かりし中にも、伊勢の國の人と紀伊の國の人と、境界を爭ふものありて、奉行の交代ある毎に論訴して熄まざりける、忠相の任に赴くや復之を訴へしかば、忠相は乃明に理非を判斷して、伊勢の人克つことを得たり、此の訴訟の此く長く滞りし理由は、當時紀州の

此の訴訟の
斯くながび
どしは何か
ぞしは何か

紀州侯は何
やに感心せし

將軍家の連枝なるを以ちて、先の奉行等は皆恐れて之を判決せざりし由るなり、然るに忠相は直に之を決して、伊勢の人の勝となし毫も憚ることなかりしかば、紀州侯大に其の公明に感せられたり、後侯入りて將軍の統を繼ぐに及び、忠相を召して普請奉行となす、明年町奉行に轉じ改めて越前守と稱す、後食邑を累加せらる一萬石を領し侯籍に列せらる、忠相は公事を裁判して聊も曲なく智識衆を超えたりと云ふ。

(格言)

私情は徹ひて、國憲を于すこと勿れ。(落聖祖)

(教授要旨)

- (一) 裁判は公明正大なるを貴ぶべきこと。
- (二) 自國の法律に遵ふべきこと。

- (三) 愛憎國憲を干すべからざることを。
- (四) 公事は私情を以ちてすべからざることを。

(教授方法)

國家あれば従ひて國憲あり、人民あれば従ひて法律あり、共に國家を維持し、人民を安泰よせんがために設けたるものなれば國民たるものは常に國憲を重じ、國法に遵ふべき義務あることを、諄々誨告すべし。

(問詞)

- (一) 大岡忠相山田奉行となり、如何なることをなししや。
- (二) 紀州侯の感歎せられしは、何によるや。
- (三) 忠相、後に何となりしや。

(應用問詞)

- (一) 國民たるものは、何故に租税を納むるの義務あるか。
- (二) 學校にありては、如何なることに服従すべきか。

勤 學

父の何故に
描畫を禁ぜしむ

父の先づ

(例話) 伊豫入道は有名なる畫人なり、幼き時より畫を好みて見るに從ひて之を寫し、眞に迫るに至るざれば筆を擱くことなかりける、父の之を悦ばずしてこれを戒め、て畫を學びたりとて何の益あるやとて堅く之を禁じたり、然るに入道に己むことを得ず、父の目を忍びて之を習ひ寸餘の閑暇を得れば、筆を採りて少くも挫屈の念なかりしかば、其の業大に進みたりき、然れども繪の具等の用意として、更になく、唯一つの破れたる土器と秃筆あるのみなれば、是を以ちて勉強したりける、一日不動の像を或る壁に畫きける、其の像宛生けるが如くなれば、觀る人毎に驚き賞せざるものなり、父も之を見て其の技に感じ

其の禁止を許し其の業を習はしめたり、是より意のまゝに書き習ひて怠らざりければ、業益進み長するに及びて遂に名工となり、其の譽を天下に顯したりと云ふ。

(格言) 好きこそ、物の上手なれ。(諺)

(教授要旨)

- (一) 己の好む學問をなすべきこと。
- (二) 好きこそ物の上手なれ、とのこと。
- (三) 上手となり人より勝るは、少壯のとき能く其の業を勵み磨くにあること。

（教授方法）

事業を務むれば、光陰は吾が質有のものとなる。懶惰なれば光陰は空閑のものとなる。辛苦の事は、卓絶の才に進むべき道路なり、絶妙の地位は辛苦せし人の獲べき恩賞なり、等の俗解より、事實に入り、奮發勉勵の念を

惹起すべし。

問詞

- (一) 伊豫入道の少時は如何。
(二) 父は如何に教誡せしや。
(三) 入道の名を擧げしは、何より始まるか。
(四) 名工となり其の譽を擧げしは、何によりてあるぞ。

(書取題案)

- [illegible]

果斷

信長を
毛利氏を

(例話) 小早川隆景の毛利元就の第三子なり、人となり英邁沈毅にして智勇人に絶く、織田信長、豊臣秀吉をして毛

征討せしめ
しや

隆景の何故
に秀吉の度
量測るべか
しらすと云ひ

利氏を征伐せしむ、隆景兄吉川元春と俱し毛利輝元を奉じて之を備中に防ぐ、信長大舉して將に至らんとするを聞き、使を秀吉の軍に遣し和を議せしむ、未成らず、會信長其の臣明智光秀の爲し本能寺に弑せらる、毛利氏の軍未之を知らず、復使者至る秀吉備し變を告げ、歸り輝元等し報せしめ和戰を決せしむ、輝元之を聞き大し喜び諸將と相議す、皆曰、此の機し乘じ之を掩撃し秀吉を獲んと、叔父隆景獨聽かずして曰、秀吉の量測るべからざるものあり、夫和議外し發して變故内に起る、常人をして之を處せしめば、必深く其の喪を秘し前議を成さん、今乃正告して隱さず其の志度るべからず、今之と戰はば我曲にして彼直なり、故し前約し従ふし如かずと、輝元之を然りとし其

の宿臣を送りて喪を吊せしめ、毛利秀包を質とし和を成し、騎隊一旌旗三千弓銃各五百を送り以ちて、是の討賊の事を助けしめしと云ふ。

(格言) 事を處するは、決斷を要す。(佐藤一孝)

(教授要旨)

- (一) 事に當りて、能く斷するは、勇なること
- (二) 果斷なれば、人其勇を服すべきこと
- (三) 一旦許諾あらば、纖毫も違へざること

(教授方法)

小早川隆景の明識善斷なるが爲、大事を定め得たることなり、事に當りては周章狼狽せず、理のあるところを明め、果決勇斷すべきを説き、種々發問しつゝ、生徒の思念を確實し、然る後格言の意を述べ、之に歸結すべし。

(問詞)

- (一) 小早川隆景の性質如何。
- (二) 毛利氏征伐の時如何せしや。
- (三) 秀吉、織田信長の就せられしことを告げしとき、毛利氏の決行は如何。
- (四) 隆景の前議を履ましめし理由如何。

(書取題案)

- (一) □チロスルハ○○○チロス

立志

北山初め句
讀を受けし
誰そ

(例話) 山本北山は江戸の儒者なり、通稱を喜六といふ、家世々幕府に仕ふ、北山夙に父を失ひ、獨母と居る、初め山崎桃溪に句讀を受く、十五歳の時、孝經を讀み、大に悟る處あり、是より常師なく、漢宋の學を講究し、又堀川牛門の學を

山本喜六の
經學は何を
以ちて根據
とせしや

修め、後、井上金峨の折衷說に服して、其の誨督を受く、北山家素より富饒、常、奇書を講究して、其の學大に進む、年二十二にして、孝經集說を著して、其の名世に顯る、故、金峨師道を以ちて遇せず、屢勸むる、人の門牆に立つべからざるを以ちて、後、竟、自一格を構へ、經學の孝經を以ちて根據とし、文章の韓柳を標本とし、詩は清新を宗、派とす、其の學の博通精核にして、天文、兵籍、五行、小説より醫卜道釋、雜家、技藝に至るまで、講究せざるゐない、四方の士來り、其の門に入るもの數百人、家資富贍にして、最藏書に富む、自、其の居る所に命じて、孝經樓と云ふ、斯く大儒とあり譽高りし、皆、幼より學に志し、刻苦勉強の結果に因るなり、後、高田侯のため、藩政を釐革し、大に力を盡せり、卒

するゝ及び侯賻弔禮は越々たりと云ふ、著す所數十種あり、皆世を益すと云ふ。

(格言) 精神、一たび到らば、何事か成らざらん。(朱子)

(教授要旨)

- (一) 志を立つる堅固ならざるべからざること。
- (二) 志あるものは、何事も仕遂げ得ること。
- (三) 一旦志たることは、半途如何なる困難も遇ふも、挫屈すべからざること。

(教授方法)

先書を開かしめ、席順を拘らず、指名して讀ましめ、全級に涉り、然る後優秀の生徒をして交互に其の意義を講話せしめ、終りて教師其の足らざる所を補ひ、又前學年まで教授したる、立志の事實と比較對話して、其の觀念を鞏固すべし。

(問詞)

- (一) 山本北山は、何國の人として、何を讀みて奮然志を立てしや。
- (二) 誰を師として、勉學せしや。
- (三) 北山は、後如何なる人となりしや。
- (四) 何侯の爲に力を盡し、ぞ。

(應用問詞)

- (一) 眞壁平四郎立志のことを、語れ。
- (二) 志あるものの事、竟に成るといへる、光武帝の語を、本題に適合して説け。
- (三) 常に轉ぶ石の苦を生せず、とい如何なる意味なりや。
- (四) 細川忠利の立志を、本題と比べて説話すべし。
- (五) 半年の英語を勉強し、又半年の筆算を學び、是も亦倦みて、今度の毛筆を學ぶ、斯の如きの立志と云ふべきか、將又此の結果の如何あるべきぞ。

(書取題案)

- (一) 山本北山〇〇〇〇のとき、〇〇と〇へる〇を、〇〇〇に〇る〇あり
- (二) 〇〇〇〇〇〇辛苦〇〇書〇〇義理〇考〇遂〇名高〇學者〇〇〇〇
- 左の句を口唱して書取らしむべし
- (三) 精神一たび到らば何事か成らざらん

孝行

(例話)

人皇第拾一代崇神天皇の開化天皇の第二子にして幼時より聰敏にして勇略に渡らせらる、壯なるに及びて寛宏謹慎にして常に國家を盛大にするの御志あり、四道將軍を遣はし不逞の徒を平け人民を愛撫し給ふ、初め天祖天照大神寶鏡を皇孫瓊々杵尊に賜ひて、汝之を視ると當は猶朕を視るが如くすべしと、因りて御歷代これを

崇神天皇の
御父君を問ふ

鏡劍を何國
の何れの處
に奉祀せし
や

殿内に祀り給ひしが、是に至りて天皇大に祖宗を尊敬し給ひ、且其の威徳を讀さんことを畏れ、祀を大和の笠縫の邑に建て、神鏡及靈劍を奉安し、皇女豐鍬入姫命をして祠に侍せしめ、別に鏡と劍とを摸し造りて、之を宮中へ置き、て護身の器となし、頗尊敬の禮を行ひ給ひ、尙神祇を祭らせ給ひけり。

(格言) 先祖を尊み、時節の祭禮を、忘るべからず。(録)

(教授要旨)

- (一) 先祖を尊み、時節の祭禮を、忘るべからざること。
- (二) 祖宗を尊敬し奉るべき禮義なかるべからざること。
- (三) 國家を盛大にするの志あるべきこと。

(教授方法)

父母存在するとき、之を愛し之を敬し、其の心を安じ悦ばせ奉り、又身罷りたまふとき、禮を以ちて之を葬り、朝夕其の靈位を拜禮し、忌辰に厚く其の祭りを行ふべきことより、遠祖をも尊崇すべきを教諭すべし。

(問詞)

- (一) 崇神天皇の御性質、及人民を愛撫し給ひしことを述べよ。
- (二) 寶鏡靈劔を如何にせられしや。
- (三) 神祇を祭られし、何故ぞ。

(應用問詞)

- (一) 孝道を全くするとい、如何。
- (二) 父母に美衣珍膳を奉りて侍養残る方なくば、是より孝行を全くしたるものと云ふべきか。
- (三) 子を思ふ、親はを親を思ひなば、世より有りがたき人といふれん。

此の歌意を説け

尊王

信長は誰の後胤にして誰の二男なりや

信長は京師に入り何ぞ

(例話) 織田信長は内大臣重盛の後胤にして、備後守信秀の二男なり、父信秀勇武智謀あり、數兵を出して地を略し、名護屋に居る、信長少時豪邁にして、細節に拘らず、勇にして果斷あり、父卒し、信長次ぎて日夜武事を習ひ、毫も國務を聽かず、豪縱なり、平手清秀諫めて自殺す、信長是より於て悔漸し、大に其の行を改め、國事を精勵せり、此の時に當り、戦乱止むなく、天下大に亂る、正親町天皇密に使を遣ひ、託するに、乱を平ぐるを以ちてす、信長謹みて勅を拜し、行々敵を平け、京師に入る、朝旨擬するに、副將軍を以ちてす、辭して受けず、當時皇宮に戦乱の爲に大に荒廢したる

を慨嘆せしむ

信長を祀りて何社と云ふか且其の社格を問ふ

を慨嘆し、皇居を造營せんと欲し、乃先府庫を充て律令を考へ法度を定めて去る、後禁城成り稍威嚴を保つに至れり、信長供御の田を置かんと欲す、然れども寇賊の侵奪を恐れ、乃權一金を輦轂の下に貸し息を収めて以ちて大内に奉じ、欽典を舉げ常職を繼ぐ、是に於きて衣冠流落の者往々舊に復し紀綱頗張るを得たり、其の後伊勢の大廟を修築し、大義名分のある所を明しして臣下たるの職分を盡せり、後毛利氏を征せんと欲し本能寺に謁す、其の臣明智光秀に弑せらる、朝廷大政大臣從一位を贈らる、當今に及び信長の英靈を建勳神社と祀り、別格官幣社に列せらる、之信長の皇室を尊崇し臣道を盡されしに依り、朝廷に於きてこれを嘉し給ふに由れり。

(格言) 忠を以ちて、君より事ふるは、臣子の恒の道なり。

(天和格訓)

(教授要旨)

- (一) 尊王愛國は、人の美節なること。
- (二) 王事に勤勞するは、人臣の常の道たること。
- (三) 皇室は忠なるは、臣子の恒道なること。
- (四) 臣下たるものは、其の職分を盡くすべきこと。

(教授方法)

八千代とことぶく、君が代を、助くる人こそ人をかしの如き兒童の耳にさゝなれたる數へ歌の解釋より、本題に説き入り格言に歸納し、吾々臣民たるものは、平日は職業を勵み、一旦事あるときは家をも身をも棄て、萬世無窮の皇運を扶翼し奉ることを、講明すべし。

(問詞)

- (一) 織田信長の幼時の行爲如何。
- (二) 平手清秀の自殺せしは何によるか、信長の性行は如何なりしや。
- (三) 何天皇より内勅を受けしや。
- (四) 信長上京して何事をあししや。
- (五) 伊勢の大廟を如何せしや。
- (六) 後朝廷にては如何せられしや。

(應用問詞)

- (一) 楠正行尊王のことを語れ。
- (二) 能く君よ事ふるを忠と云ふとは如何。
- (三) 平重盛の事蹟を述べよ。
- (四) 菅原道真の詩を覚え居らば書け。
- (五) 乱世にあらざれば尊王の義を顯すこと能はざるか、如何。

(書取題案)

- (一) □□の○○○○○○を□ていたく○○○□よしゆふくし□りけり

- (二) □ナ□ナテ□ニコフルハ□ノ□ノ□ナリ

愛國

(例話)

新田義興ハ義貞の第二子にして幼名を德壽丸と云ふ、延元二年源顯家鎌倉を攻むると聞き、德壽兵を上野に起し三万を以ちて之に合し、遂に鎌倉を陥れ西上し上杉憲顯を青野原に破る、顯家薨するに及び其の弟顯信と男山は據る、王師敗績して德壽吉野に詣る、帝延見して其の才器を嘉み給ひて曰、汝ハ父の家を興すべきものなりと、因りて名を義興と賜ふ、義貞死するに及び弟義宗義治と、足利尊氏を鎌倉に撃ちて之を走す、尊氏の軍又振ひ來り攻む、義興のち信濃に走り北陸諸將の動靜を伺ひ再

帝の宣ひし
御言を述べ

舉を計る、叛臣の爲に欺れ矢口の渡に於きて自殺す、土人祠を建て今に至るまで之を祭る、新田大明神といふ。

(格言) 國は報ゆることを思はざるは、豈忠からんや。(孝經)

(教授要旨)

- (一) 國を愛するの元氣なかるべからざること。
- (二) 國恩を忘るべからざること。
- (三) 君に奉ずるに、忠と義とを、以ちてすべきこと。

(教授方法)

前々學年より於きて既に授けたる、愛國の事項を網羅し來りて、擴張教授を施すの連結をなすべし、即生徒の腦裡に存する所の思想の範圍より歩を起して、一の元素より他の元素に進み、之を新題を附加して以ちて愛國の志念を確實にすることを務むべし。

(問詞)

- (一) 新田義興は、誰の子にして幼名を、何と云ひしや。
- (二) 誰と共に鎌倉を、陥れしや。
- (三) 尊氏の謀反せしとき、如何とせしや。
- (四) 新田大明神とは、誰を祭りしぞ、且何地にありや。

(應用問詞)

- (一) 己を後にして國を先にす、とは如何。
- (二) 常に忠義を以ちて國に報ゆべし、どの意を述べよ。
- (三) 天下の愛に先ちて憂ふ、どの意解をなせ。

(書取題案)

- (一) 國○○○○○○○○思○○○○○豈忠○○○○

孝行

(例話)

山崎闇齋は、鴻儒あり、京師に生る父清兵衛木下家

闇齋の父の
姓名と職業
とを問ふ

に仕ふ、後致仕して淨因と号し針醫を業とす、母ハ佐久間氏なり、闇齋幼にして英邁なり、其の祖母多治比氏常に之ヲ語りて、諺ハ身ハ一錢、目ハ百貫なり、といへり、汝善く字を習ふべし、文字を知らざれば盲ハ異らずと、母佐久間氏も亦訓へて、鷹は饑ゑても穂をつまらず、士ハ宜しく志を高尙すべしと、父闇齋を僧となす、偶土佐の公子某寺に在りて僧たり、此の兒神姿凡からず當になすことあるべしと、乃遣して土佐の吸江寺に學ばしむ、是の時土佐に谷時中、野中兼山あり、共に儒を業とす、闇齋を見て亦深く之を器とす、勸めて經籍を學ばしむ、闇齋乃經學を修め孜々として怠らず、還俗して髮を蓄ふ、闇齋常に其の祖母及母の教訓を服膺し遂に大儒となり、京都に居るに従ひ

闇齋は禮を
厚くして師
事をせし諸
侯如何

學ぶもの多し、後闇齋江都に來る、井上河内侯、會津侯保科正之、美作侯加藤泰義、皆禮を厚くして師事せり、而して會津侯最厚く、終始一の如し、闇齋も亦感奮思ハ答ふるを思ひて云はざることを、後京都に歸る門徒數千人に至ると云ふ。

(格言) 父母の教あらば、謹みて行ふべし。(證記)

(教授要旨)

- (一) 父母の教は、謹みて行ふべきこと。
- (二) 父母の教は、背くべからざることを。
- (三) 父母長上教あらば、謹みて聽くべきこと。

(教授方法)

這へば立て、立てばあゆめど、老いが身の、
我ハはつゝもる年をわすれて、

斯の如く、親の子を思ふの情より説き起して、事實に入り格言を歸結して、以ちて父母の教訓の守るべく背くべからざることを諭すべし。

〔問詞〕

- (一) 山崎闇齊の祖母の言は、如何。
- (二) 闇齊の母の教訓は、如何。
- (三) 父は闇齊を、如何にせしや。
- (四) 闇齊の土佐に至りしは、何よりよるか、且誰を師として學びしや。
- (五) 闇齊の大儒とありしは、何によるぞ。

友愛

重成は幼少にして父母を失ひ誰を養ふにせられしを

〔例話〕 井上重成は相模國足柄縣今の神奈川縣の士族あり、幼少して父母を失ひ兄の祇董は養育せられ、近傍の小學校に通ひて學問を勉強したり、然るに兄は不幸にして

隣生の事情が重成の事を如く述せしは

病に罹れり、家貧しき上に他一人かけきは、重成夙に起き自炊き病者の口は適する食物を撰擇調理し、能く看護に意を用ひ、醫家に往復して藥を供へ、寸時も怠らず、兄の快愈の一日も早からんとを祈れり、故に己の粗食を厭はず充分病者の用意をなして後、日々學校に通學せり、歸れば又傍に在りて看護し怠るをなれ、往々行厨を具ふる能はざる時ハ午飯を食せせして、退散の時まで更に倦むことかく其の業を勉めけり、家事の爲昇校の時間を違へ、教師に諭さるゝも更に事の由を辨解せず、唯身の過を謝するのみ、此の如き事再三に及びけり、隣生の之を知るありて、代りて其の情實を明し告げたり、教師も其の友愛の情の厚きに感じ、大に重成を賞したり、聞くもの亦皆感涙を

流しけり、此の事官に聞えけきは、幼にして學業を勉勵し且、悌道を守れることを嘉せられ、金若干を賜りて、其の善行を賞せられたりと云ふ。

(格言) 弟たるものハ、起居、出入、衣類、飲食、何によりらず、兄を先にして、我が身を後にすべし。(新語子孫)

(教授要旨)

- (一) 友愛の情は、兄弟間になかるべからざることを。
- (二) 弟は何によりず、兄を先にすべきことを。
- (三) 兄病あらず、弟看護し、弟病めば、兄病み侍すべきことを。
- (四) 兄弟は、互に相援け合ふべきことを。

(教授方法)

兄弟姉妹は、相互に親愛し、相互に扶助すべきことより、世にはたまくもてる、兄弟姉妹と財の爲に相争ひ、相遠ざかるなど、淺ましきことなき

にあらず、財の爲に同胞連枝を棄つるは、人道に背くことの最甚しきものたることを、克く教授すべし。

(問詞)

- (一) 井上重成は、何國の人にして、其の有様如何。
- (二) 重成の兄は、如何ありしや、其の時重成は、何事をなししや、詳に述べよ。
- (三) 時間と後れし時、教師よりの戒は、如何。
- (四) 後重成は、官より如何せられしや。

(應用問詞)

- (一) 兄は其の弟を愛し、弟は其の兄を敬す、とは如何。
- (二) 兄友と弟恭あるは、不易の典なり、との意解をなせ。
- (三) 兄弟は、五本の指の如し、といへる言葉を、説話せよ。
- (四) 大阪の谷比う、及、伊豫の儀助の友愛なりしことを、説話すべし。
- (五) 兄弟仲悪しきときは、其の父母たるものの心は、如何あるべきぞ。

(書取題案)

□ニスベシ

以真道忍色

□
□
かんこを□
らざりけり

仁慈

(例話)

(例話) 次郎兵衛ハ、越後國の長岡城下裏二町に住み、商人なり、天明元年六月、當リ、長岡ハ洪水暴漲シ、家屋樹木を流シ、人畜の溺ルゝもの甚シク、泣キ叫ブ聲喧シク、實ニ慘狀を極メタリキ、次郎兵衛見聞するに忍ビズ、此處彼處と救助船を傭ハント欲するも、船頭等ハ我が家の危キを以チテ、應ずるものトてハあらざリける、上田妻有より來リ居リシ船頭某ハ、父の代より別懇にセシものなきハ、再

越後長岡の
大洪水の
年何月か何

次郎兵衛が
領主長岡侯
より紋付の
上下を賜り
し何の功
によるか

三の懇請より遂に諾じたり、長さ十間餘の船三艘ありしが、一艘に薪の積荷ありたり、次郎兵衛其の價幾何を出し速に流し捨てしめ、船子等に勢をつけしめんため、酒樽或飯桶二三を載せたり、既にして、處々を漕ぎ廻し、二百餘人を助けて、數日間食を與へて養ひ置きたりと云ふ、領主長岡侯之を聞き某の善行を賞せらるゝ、紋付（きりぎりす）の上下を賜はり、其の後寛政元年閏六月洪水あり、其の時も數多の人を救助せしかば、黄金を賜りて褒賞せらるゝたり、後四十年間水旱等の時は貧民を賑恤じたりとぞ。

(格宣)

人を濟はゞ、急難を迫るものを、救ふべし。(類体集)

(教授要旨)

(一) 仁慈は、徳行中、最善良なるものたること。

- (二) 難儀あるものを、憐み救ふことを、心掛くべきこと。
- (三) 殊に急を迫るものを、救ふべきこと。

(教授方法)

先格言を解釋して事實を説き及ぼすべし、其の講話は活潑と熱心と同感の情とを表し、其の發音は怒氣を含まず悲哀を帶びず、且高聲明瞭にして聴覺に感じ易きことを要す、其の動止は威嚴と寛大とを具備すべし。

(問詞)

- (一) 次郎兵衛は何國の人にして、天明五年洪水の時、如何せしや、詳に語るべし。
- (二) 長岡侯之を聞き、如何せられしや。
- (三) 其の後、次郎兵衛は何事をなししぞ。

(書取題案)

(一) 人○○○○○○○○○○追○○○○救○○○

節 儉

昌幸の人となり

刀劍も亦然りとは何ぞ云ひしぞ

(例話)

眞田安房守昌幸は名將と呼ばれし人なり、性節儉を尙び帶ぶる所の刀の柄を纏ふに、粗末なる木綿の打絲を以ちてせり、或る人之を嘲けり笑へり、房州襟を正しくしていひけるは、奢侈は人の惡徳なり、之を小にして、身を亡し家を破り、大に以ちて國を滅するに至る戒めざるべけんや、且夫人にして如何ある美服を着たまはとて、心に於て頑愚ならは、何の用にも立たざるべし、刀劍も亦然り、先吾魂を見るべしとて、兩刀を脱ぎ放てば、玉散る如き名刀にして相摸正宗の鍛鍊せしものなまは、其の嘲りたる人大に赤面して、返す言葉もなかりしと云ふ。

(格言) 身を守るの方、節儉を要す。(伊藤仁賢)

(教授要旨)

- (一) 人は、恒に儉約を守るべきこと。
- (二) 人は奢侈に流れ易きものなれば、謹むべきこと。
- (三) 儉約ならざれば、小にしては身を亡し、大なれば國を亡すに至ること。

(教授方法)

節は、物事を程々ふすることにして、儉とは、つゝまやかふすることよし。て、身の程を守りて財を貯へ、一家の幸福安寧を保つべき等の談話より、漸次事實を推し移り、適當の發問をなしつゝ、格言を歸結すべし。

(問詞)

- (一) 眞田昌幸行爲の大畧を述べよ。
- (二) 昌幸は、刀劔を、如何になしおかしや。
- (三) 嘲る人に、何事を語りしや。
- (四) 嘲る人は、如何にせしぞ。

(應用問詞)

(一) 徳川光圀公節儉の事蹟を、話せ。

(二) 汝等は、父母より筆紙などを貰ひ、之を如何に使用するぞ。

(書取題案)

(一) 眞田昌幸 ○常 ○木綿 ○○○○○○○○○○○○○○○○○刀 ○○○○○○

勉 職

(例話)

唐の名臣狄仁傑は、則天武氏のととき同平章事となる、武后は高宗皇帝の皇后なり、高宗崩じて中宗立つ、幾何もかく后帝を廢じて廬陵王となし、國號を改めて周と曰ひ、自皇帝と稱す、唐の宗族及名臣刑戮せらるゝもの甚多し、仁傑も亦讒せらるゝて獄に下る、後數年其の冤なるを以ちて官に復せらる、武氏位を其の一族に移さんとせり、而して意未決せず仁傑從容として其の不可なることを諫

國號を何と改めしや

- (一) 人は能く其の職務を勤むべきこと。
(二) 君過あれば、面折直諫すべきこと。

(三) 君に事へて、忠義を竭すべきこと。

（教授方法）

官に居るものは事又當りて難を避けず、(語國)といへる解釋又説き起し其の職にあるものは、一身一家を顧慮することなく、君過あれば直言諫争して其の職分を全くすべきことを、事實に参照して切に教授すべし。

(問詞)

- (一) 狄仁傑は、誰に事へしや、則天武氏は、如何なることをなせしぞ。
- (二) 仁傑は、則天武氏より、何事を上言せしや。
- (三) 則天武氏は、諫を容れて、何をなせしや。
- (四) 仁傑は、如何なる人を、指名推舉せしや。
- (五) 唐室の衰頹を、挽回せしは、誰の功なりや。

(書取題案)

- (一) ○○○○○○○○○○○○○○
 唐室○○○○○○○○○○
 ぎしは□よ仁傑○○
 なり

黒澤甚兵衛
の人のなり
を問ふ

沈勇

(例話)

黒澤甚兵衛は、初め小野寺氏に仕へ、後去りて佐竹義宣の臣となる、人となり言寡く外柔にして内剛なり、佐竹氏の臣其の新進を以ちて之を凌侮して嘲罵せり、然れども甚兵衛聞かざるものゝ如く與ふ較せざりしかば衆以ちて怯となす、大阪の役義宣に従ひて西上し岩崎を過ぐ偶一老翁ありて甚兵衛に禮して曰、吾嘗卿の馬を調する狀を觀しは平庸のものゝあらず、此の行や必殊功あらん、と一大刀を與へて以ちて贖とせり、衆竊に之を異とせり、既にして大阪に至り、義宣甚兵衛に命じて柵を今福に列せしむ、時に天闇し士卒炬を持ちて従ふ、城兵炬を望み

甚兵衛は如
何よしして銃
丸を避けし
めしや

銃を放つこと雨の下るが如し、甚兵衛乃士卒に令して炬を地に列せしめて、數十歩を退きければ敵の銃丸皆炬火に叢る、甚兵衛曰可なりと、士卒を督して柵を樹て炬の燐する比柵なる、而して一卒を損せず還り報ず、梅津某は佐竹氏の驍將なり、素より甚兵衛を輕す謂ひて曰、敵の銃聲絶えず汝の柵を樹つるを監するを無からんと、甚兵衛色を作して曰柵の堅きと監せざるとい往きて之を檢せよ、且吾が勇怯を知ると欲せば明旦の戦を見よと、辭氣凜然として犯すべからず、聞くものみを其の平生に類せざるに驚く、翌日陣に臨みて果して健闘して大に功あり、是に於て衆始めて其の沈勇に服し、感歎せざるもれなしと云ふ。

(格言) 安重深沈なるものハ、よく大事を處す。(從政名言)

(教授要旨)

- (一) 一人は常に沈着として、勇氣をかるべからざることを。
- (二) 勇者は、狼りゝ争ふことなきこと。
- (三) 眞の勇者は、外柔にして内剛なること。
- (四) 深沈なるものは、大事を仕遂ぐることを。
- (五) 勇氣なければ爲すこと能はざるなり、されば勇氣は衆多の徳を實行せしむるの原動力たることを。
- (六) 常に眞の勇氣を養成すべきこと。

(教授方法)

演繹的に教授すべし。

(問詞)

- (一) 黒澤甚兵衛は誰ゝ仕へしや、其の時古參のものは、如何ゝ遇せしや。

- (二) 大阪の役、如何なることを命せられしや。

- (三) 梅津某との問答、如何。

- (四) 如何なる功ありしや。

(應用問詞)

- (一) 眞正の剛勇は眞正の溫柔と必相隨ふとは如何なる意味か、本題の事實と照合して説明せよ。

- (二) 輕浮淺率のものは、大事を處し得べきか。

- (三) 眞勇と匹夫の勇とは、如何なる差違ありや。

(書取題案) 左の句を適宜の方法にて書取らしむべし

- (一) 人となり言少く物やはらかありしかば人々あなぞりておくびやうものと思ひけり

- (二) 我が勇と怯とを知らんと欲せば明日の戦をみよと云ひて辭氣すさまじかりけり

- (三) 翌日ゝ至り花花しく戦ひて功名ありしかば人々始めて其の沈勇にふくせり

天智天皇は
第何代の君
やにまします

果斷

(例話) 人皇第三拾八代天智天皇ハ、中大兄と申し奉りて皇子にてはしける時、大臣蘇我の入鹿權を專し皇族を横殺し、終に天皇の御位をも奪ひんとせしかば、密に中臣鎌足と計り與に之を除かんを語らひ、蘇我石川麿佐伯子麿等を引きて援となす、三韓の使者入朝するの日を以ちて入鹿を殺さんと定めたりき、やがて皇極天皇大極殿に御し入鹿入侍す、天皇豫石川麿に三韓の表を讀ましめ、子麿等も入鹿を斬ることを命じ、衛門府を戒めて諸門を鎖さしめ、親長槍を執りて殿側は立つ、鎌足弓矢を持て侍衛したり、其の時も當り、敢發するものなり、天皇其の

中大兄皇子
皇太子とな
られしは、何
か天皇の御時

機を誤らんことを恐れ、急に進みて入鹿を撃ち其の肩に中つ、子麻呂等進みて其足を斫り遂に入鹿を殺し、蘇我氏を亡して皇室を安じ奉りたり、孝德天皇御位に即き、中大兄皇子を以ちて皇太子となす、後帝位に即き仁政を施し給ふ、之を中興の祖と稱す。

(格言) 惟、克く果斷ふれば、乃後艱ふし。(書經)

(教授要旨)

- (一) 克く決斷すれば、後艱あることなきこと。
- (二) 事を處するに、勇氣なかるべからざること。
- (三) 勇氣あるもの、事に當りて躊躇せざること。
- (四) 王室に寇せんとするものあるとき、身命を棄て、其の寇を討平すべきこと。
- (五) 我が國の臣民たるもの、萬世一系の皇運を、扶翼すべきこと。

(教授方法)

其の方法を歸納的に資るべし。

(問詞)

- (一) 天智天皇ハ、初メ何ト申し奉リシヤ、當時、蘇我入鹿の舉動ハ、如何。
- (二) 誰々ト、御相談ありシヤ。
- (三) 何時、何處ハ於きて入鹿を誅し給ひシヤ。
- (四) 皇室を、泰山の安きハ置きしハ、誰の功なるぞ。
- (五) 何故に、中興の祖ト申し奉るか。

公益

(例話)

伊能忠敬ハ上總の國の人ナリ、夙に歴數の學を好み、幕府の儒高橋至時に從ひて、西洋曆法を勵み益其の學を研きたリ、忠敬ハ弘く世の利益をなさんことをつとめ、

伊能忠敬の
人となり

日本全國の
實測に何ヶ
年を費せし
や

常に己を持すること節儉なり、然れとも性慈善にして飢餓の時金穀を惜まずして貧民を救助すること數々なりき、忠敬家を譲りて後ハ常に我が國の地形を測量し以ちて國益をなさんと欲し、遂に幕府ハ請ひ私費を以ちて、第一蝦夷地方の海岸を測量することを始めたり、忠敬乃江都を發し陸奥を歷て蝦夷ニ下り、過ぐる處の驛路の里程及山川の位置沿海土地の高低等を、詳に測り還りて奉れり、其の後沿海測量の命を受け、數年の間其の事に從ひしが、確に其の數を知り經緯度を決めたりき、是より險しきを凌ぎ危きを蹈み勞苦を意とせず、日本全國の實測をなし、八ヶ年にして全く其の業を終へたり、齡七十餘なりしと云ふ、輿地全圖其の他の書を著したり、後測量に

從事するもの皆此の圖に據らざるはなく、西洋人も其の精確あることを感稱せり、明治の御世に至り、天皇陛下、其の空前絶後の偉業を嘉し、從四位を贈られたりと云ふ。

(格言) 人ハ、其の身位の尊卑を問はず、己の國を裨益する事を忘るべからず。(勸善訓蒙)

(教授要旨)

- (一) 己の國を裨益することを勤むべきこと。
- (二) 人ハ、其の身の尊卑を問はず、自國の利を益計るべきこと。
- (三) 人ハ、常に公衆の利益となるべき事を、興すに意を注ぐべきこと。

(教授方法)

公益といへる題目の問答より、漸次進みて事實と格言の意味を明了に説述して、然る後斯の如き大事業、斯の如く多くの年月を費さるるも、其

身分に應じて、夫相應の公益を計るべきことを、勸誘獎勵すべし。

- (一) 伊能忠敬ハ、何國の人にして常に如何なることをなせしや。
- (二) 忠敬家を譲りて後、如何あることを企てしや。
- (三) 日本全國を、實測せし年間は、幾何なりや。
- (四) 明治の御代になり、如何なる榮譽を得たりや。

(應用問詞)

- (一) 黒井幽量、公益を計りし事蹟を、語れ。
- (二) 汝等の仲間にて、學校の遊歩場ある、妨げとなるべき石瓦を、日々運び去りしものありとせば、其の行爲を何と云ふべきぞ。
- (三) 大雨にて、堀ふちの石垣額れたり、或る人往來の人の爲に、其の周圍に垣根を結ひしとぞ、其の行爲は何と云ふべきか。

(書取題案)

- (一) 〇〇〇の〇〇をなさんことをつとめ
- (二) 常〇節儉〇守り

- (三) 蝦夷□□□□を測量○○○○○○○○けり
- (四) □□の□□までも□□款賞○○
- (五) 人○其ノ□□ノソソビチ□□□□□□をヒエキスル□□チ□ルベカラズ

仁慈

困窮人のありさまは如何

(例話) 亞米利加のある都府は一夜火事起りしが、折ふと冬の風烈しくして火の益廣りて、多くの人家を焼き拂ひたり、此のとき災は罹りて困窮人は、其の日より身を寄する所なくて、雨に沐し、風は櫛り、飢渴に迫り實に慘狀を顯したり、時に慈善のめれ打ち集ひて、廣く人々に金錢と穀物とを募りて、其の罹災者を救はんことを新聞紙に廣告せり、此の時一人の童子あり、錢六センツと古き着物一枚

童子は少きを愧ぢらひして何といひしや

と林檎若干とを携へ行きて、此の品を貧しき人に與へらきたし、然きども人みな其の少なきことを笑へり、願はくは少なきことを尤めずして、是を與へられんには、私の喜び言葉に盡し難しと述べたり、世話する人其の幼くして慈善の心の深きに感じ、童兒に向ひて人に物を恵み與ふるに、其の身分に相當するをよしとて、此の兒の贈物には過ぎたりとて、大に賞して品物を受け納め、貧しき人に與へたりと云ふ。

(格言) 人は己の産業と、他人の窮乏とを、比較し以ち

て、恩を施すべし。(貝原益軒)

(教授要旨)

(一) 人に物を恵むは、其の身分に相應するを、可とす。

- (二) 人の窮乏を見ては、務めて救助すべきこと。
- (三) 人は惻隱の心なかるべからざること。
- (四) 人間の最上の樂は、自善をなし人を救ひて、其の喜悅の顔色を見るに越えたることなきこと。
- (五) 人の火災又は震災にあひしを聞かば、我が身もひきくらべて、其の困難をおもひやるべきこと。

(問詞)

- (一) 亞米利加の一都府火災の時の景況如何。
- (二) 一童子は、何を持參して、救助せんとせしや。
- (三) 救助の世話人は、其の時何と云ひ聞かせしや。

(應用問詞)

- (一) 吾が身をつめりて、人の痛さを知れどは如何。
- (二) 己の欲せざる所は、人に施すこと勿れどは如何なる意味か。

正直

小作人
如何なる
ことか

地頭の六平
如何なる
ことを賞せ

(例話)

昔伊豫の國に六平といへる農夫あり、性質實直なり、家貧しくして我が田地とてゐあらざりけきは、小作人となりて人の田を耕して其の業を勉めけり、元來六平の耕す田地は七斗の收穫を納め、他は自分の利得となるなり、毎年其の米を納めて少しも怠るゝなかりき、或る年凶作に遇ひたれば、檢分を受け二斗の減縮を請ひしに、地主は之を許したり、然るに秋穫の時に及びて見れば、先に想像せしより収入ありたるにより、自一斗の米を携へて、其の事由を陳述して地主に納めたり、此の事地頭の耳に入りたきに、地頭は大に其の篤實正直なることを賞せら

き、米數苞を賜りたりといふ。

(格言) 船は、櫓楫を以ちて、大海を航し、人は、正直を以ちて、世に交るべし。(北條時頼)

(教授要旨)

- (一) 人の常は正直を冒として、少しも偽を云ふべからざること。
- (二) 正直を以ちて交るものの終始變らざることを。
- (三) 正直なるものの、人は愛せられ、福を享くべきこと。
- (四) 正直ならざれば、人に棄てられ、禍に罹るべきこと。

(教授方法)

格言を講話して、然る後發問しつゝ、事實を説き去るべし。

(問詞)

- (一) 六平の何國の人にして何を業とせしや。
- (二) 凶歳の時六平の地主に何を請ひしや。

(三) 秋穫に至りて、如何なることを生ぜしや。

(四) 地頭より、何の廉を以ちて何を賞與せられしや。

(應用問詞)

(一) 正直の頭は神やどの、如何。

(二) 直あれば、重荷かけても、折れぬの、

世渡るわざの、いさづゑぞかし。

どの歌意を問ふ。

(三) 心だも、誠の道に、かなひあは、

祈らずとても、神やまもらん。

どの歌詞を意解せよ。

惜陰

(例話) 皆川淇園の儒者なり、文藏と稱す、京都に生る、穎異なり、四五歳にして能く字を知る、其の父試みに杜甫秋興

書を讀むと
き何回もし
て記憶せし
や

湛園は何故
に客あるも
送らず迎へ
ざりしぞ

の詩八首を書して之を授く、日ならずして誦をなす、父之を異として、書を讀ましむ、一たび過ぐければ即記憶す、父其の學を大成せしめんと欲し、經史百家の書需めし隨ひて之を給す、又當時の宿儒耆老と交通往來せしむ、年甫めて十五、韓客を見て席上倡和す、詩句甚巧なり、韓人歎稱す、遂に名を擧げ著述を事とす、弟子門籍は上るもの凡三千餘人、平日人を待つ貴賤一の如く、常に端坐し、門人來りて業を受け、或賓客あるも迎へず送らず、嘗坐を移すことなし、來人歸きは直に机案に倚りて讀書に耽る、是を以ちて婢其の室を掃除すきとも、毎に其の坐に及ばざりけり、一日その外出を伺ひ見れば、其の坐席窪み黯黒にして殆腐蝕せしと云ふ、其の勉學此の如きを以ちて學の深きを測

るべからず、經學文章を以ちて海内に鳴る、著書數十種ありと云ふ。

(格言) 天地に萬古あれども、此の身ふたたび得ず只百年、此の日尤過ぎやすし。(洪自誠)

(教授要旨)

- (一) 歲月は流水の如し、一旦去りて再來らざること。
- (二) 時は得難く失ひ易し、心に悔ゆと雖、何ぞ及ばんとのこと。
- (三) 人は小壯の時、學業は出精すべきこと。
- (四) 名譽を揚ぐるは、光陰を徒費せざるより生ずること。

(教授方法)

教師生徒の當時の地位を顧みざるときは、或既知を新寄として授けんとし、或未知を既知と認むるの恐れあり、斯の如き教授は、或倦退を生ずべく、或理會に苦ましむべし、故に發育の程度を斟酌教授すべし。

(書取題案)

- (一) 皆川淇園は何國の人として、幼時の有様は如何、父は如何に教育せしや。
(二) 淇園十五歳の時、如何なることありしや。
(三) 業成るの後、弟子を遇する如何せしや、且寸暇あれば如何せしか。
(四) 淇園一日外出の時、下婢に如何なることを見出せしぞ。
(五) 光陰一度去りて復返らずとい、如何。

(應用問詞)

- (一) 歲月人を俟たずとい、如何。
(二) 光陰箭の如し、どの意解をなせ。
(三) 今日の後より今日を、いひしものぞ。
(四) 今日といふ其の今日の目に、働きて、今日の仕事を、明日より延すな、との意解をなせ。
(五) 光陰一度去りて復返らずとい、如何。
- 言取題案
- (一) 心○學○○○○○常○日○○○○○○○○○○
(二) □する□も□をはなさず□□りて□□する□なぞの□によりて□
をうつさず
- ニ□□アレドモ□□○○○○○得ズ只□□此ノ□□ギヤス

節制

程婆は常に
何と云ひし
ぞ

(例話) 程婆は備中の寡婦なり、子なく獨處り紡績して自給す、資性良順、易直なりけきは、人人之を愛せけり、隣里のもの相備ひて賃金を與ふるに、其の受くる所自給するに止る、多く與ふれば、則之を辞す、其の常の言に曰、物自程あり程を踰ゆるは禍なり、程といふ節儉を云ふなり、是に於きて衣服飲食より寢所作息に至るまで、凡べて之が程をな

程婆は年幾
つにて死せ
しや

さざることなり、而して其の人と言ふも亦程を稱せざるなり、里人みな之を愛し之を呼びて程婆となす、婆も亦以ちて自號となすと云ふ、一日忽ち縊きて死す、隣里駭き異ひて風を病むものと爲す、屍を檢するに及び一の書あり、衆共に之を開き見るに、程婆子なり久しく隣里の恩を荷ひて、饑うることもなく凍ゆることなり、年已に七十にして無病壯健なり、人に一錢を負ひず人生の事足きり、衣衾の手足を裏むに足る、而して餘す所は以ちて棺を買ふべし、釜鍋の鬻ぎて粟となし以ちて讀經の僧に飯すべし、一筐の續苧に沾りて酒となし、以ちて埋葬の勞に謝すべし、生程を超ゆれば則病む、乃辱に寢して食することなく、粥を糜して隣里を累す、然り而して死せば衣棺隣里を煩して

程婆は何故
は縊れて死
せしや

粟の僧に飯すべきなく、躬の勞を謝すべきなり、我豈生を貪り重ねて、鄰里を煩すべけん、程婆今死するに程婆の程なり、永訣々々と衆相顧みて釋然たり、之が爲に經營して悉其の遺言の如くせりと云ふ。

〔格言〕 事只五分なれば悔なし、味只五分あれば偏に美し。(續小兒語)

(教授要旨)

- (一) 人の能く己の地位を顧みるべきこと。
- (二) 物自程あり程を踰ゆれば禍となること。
- (三) 凡べて人の節儉の習慣を養ひざるべからざること。

(教授方法)

先難解の文字を黒板に摘書し、其の讀方意義を問答し、然る後生徒をして書を開かしめ、一節づゝ指名して讀ましめ、全級に涉りて後教師節制

の意義より事實に入り次ぎて格言に入り、二三の問答をなして、其の思想感覺を確むべし。

(問詞)

- (一) 備中の程婆の性質は如何
- (二) 程婆の號の起りしは、何によるぞ。
- (三) 程婆の遺書の言を、詳に述べよ。

(應用問詞)

- (一) 慾深き人の心ど、降る雪は、
つもりく、道をわするゝ。
とは如何なる意か。

- (二) 慾を制するは廉耻を知るにあり、とは如何なる意か。
- (三) 慾淡ければ心清し心清ければ理あらはる、とは如何。

(書取題案)

- (一) 紡績○○○○をいとなみけり
- (二) □には□といふものあり□をこゆるは□あり
- (三) □□これを□して□□と□ければ□□りて□となせり
- (四) □□□□ナレバ□ナシ

勤學

晴信の幼名を問ふ

(例話) 武田晴信は足利の末戰國の頃名高き勇將なり、信虎の一子にして幼名を勝千代と云ふ八歳の時長禪寺の僧に従ひて書を學びたり、一日師僧之は玄惠法師の書と庭訓往來を授けしは、僅二三日にして悉暗記し、其の意義をも了解し得るに至りたり、晴信よりて其の書を師僧に返し、且云ふやうに玩味すべき價值ある書とあらず、他に善き書冊あらば何なりと思借を煩はせしと請ひに

信晴は如何に
にして軍事に
長せしや

き、師僧深く其の見識の高きに感じ、更に七書と云へる兵書を貸し與へたり、晴信の之を得て大に喜び、日夜孜々として倦む色なく、其の書を勉強して終に軍事に長じたり、後成長して軍法あてり、其の時代一二を爭ふ處の豪傑となり、英名を千載の下に残したり。

(格言) 玉琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず。(禮記)

(教授要旨)

- (一) 人學ばざれば、道を知らざることを。
- (二) 人にして道を知らざれば、禽獸に等しきことを。
- (三) 人にして名を舉げんと欲せば、須らく學に勤むべきことを。
- (四) 學みあらずれば、天稟の才を、伸ぶること能はざることを。

(五) 楚玉の琢磨に緣りて、照車の器となり、人の切磋を待ちて、穿犀の才を致すべきことを。

(教授方法)

發問よりて其の注意を惹起し、演繹的に教授すべし。

(問詞)

- (一) 武田晴信、寺僧に書を學びしとき、庭訓往來を如何にせしや。
- (二) 七書を受けて、如何にせしや。
- (三) 英名を、天下に轟かせしは、何によるぞ。

(應用問詞)

(一) 源義家勤學の事蹟をいなせ。

(書取題案)

(一) ミミガカザレバ□ナ□サズ□□バザレバ□ナ□ラズ

處事

野火止の地勢如何

(例話)

溝渠は何地に起り何地に終るか其の長さをも問ふ

松平信綱、武藏の國川越に封せらる、領内一邑あり野火止といふ、地水に乏しく乾土風に舞ふ、田里蕭然として五穀實らず百姓窮乏す、代官安松金右衛門之を憂ひ建議して曰、野火止の地不毛なるは水利なきに因るなり、新溝渠を穿ち玉川の水を引く時、地味變じて良田とあすを得んと、信綱要する處の金額を問ふ、曰、三千金なりと、信綱曰、余は長く此の地に留るべきものにあらす、然れども三千金を以ちて公衆を益することを得るは、亦職として止むべきにあらざるなりと之を許す、是に於きて金右衛門役夫數百人を督し日一之を穿つ、溝渠の長さ十有六里小川村より始めて新河岸に至る、已にして工事竣工するも水至らず、信綱之を詰る、金右衛門曰、臣も亦之を考ふる

溝渠開鑿の後水未至らざるも地勢に如何なる變化ありしを問ふ

に未其の理を知る能はず、願はくは一年の後を待てと、明年に至るも水尙至らず、信綱又金右衛門を召し責めて水未來らざるの何の故ぞや、願ふに汝地勢の高低を察せずして妄りに工を起せしに由るならんと、金右衛門之に答へて否然らず、臣今日に至りて悟る所あり、抑野火止の地たる武藏の中央にあり、曠漠たる原野にして風起るときの座上積みて堆をなす、是新渠開鑿前の事なり、然るに今年ハ然からざるのみならず、野菜青々として生茂せることに由ること明なり、是を以ちて考ふれば水の至る遠きにあらざるべし、且古語に云はすや河潤百里と、請ふ暫く之を忍べと其の明年一夕大に雨ふり水勢奔激し、十六里の

金右衛門の
何故に感賞
せられしや

間河水満盈せり、是より野火止の地一變て良田となり、
邑民長く其の恩澤を蒙り、信綱喜びて曰、金右衛門の三
年の久しきを經て其の志を挫かず、洵に感賞すべしと、其
の祿を増す、後登用せられ顯職に至れりと云ふ。

(格言) 凡一事あれば必一理あり、理を以ちて事を處
すれば、自然に順治す。(居業錄)

(教授要旨)

- (一) 理を以ちて事を處すれば、自然に順治すること。
- (二) 剛毅なる心志の力を以ちて事を當るべきこと。
- (三) 凡一事あれば、一理あるべきこと。
- (四) 一旦志したるとは、中途如何なるに出で遇ふとも、挫屈せざることを。

(教授方法)

教授に於きて、適度を守り無益の周密を求めず、生徒後に至りて忘却せ

ざらんが爲に成るべく少なくて丁寧な教ふべし、故に一課を二回或三
回に教ふるも妨なし、要する所の實踐躬行を勧誘するにあり。

(問詞)

- (一) 安松金右衛門、誰に仕へしや、且如何なることを、建議せしか。
- (二) 工事成功するも、水至らざるにより、信綱如何にせしや。
- (三) 三年の後水至りて、野火止如何なる田地と化せしぞ。
- (四) 金右衛門、後如何なる職にありしや。
- (五) 一事あれば必一理あり、どの如何。

寛大

高倉天皇の
御性質の如
何

(例話) 人皇第八拾代高倉天皇は、後白河天皇の皇子にて
て諱を憲仁と申し奉る。天性寛仁にして大度なり、嘗御幼
少の時に楓樹を獻するものありしが、天皇に深く之を

唐詩の如何

愛で、藤原信成に命じて之を守らしめたり、一日仕丁將は酒を飲まんとし、其の枝を折り薪として酒を煖めけり、信成之を見て大に驚き、仕丁を捕へて罪に置かんとせり、偶天皇信成をして其の樹を上らしむ、信成具に其の事を奏上せり、時、天皇の御愠りの色として、更になく、従容として唐詩を吟じて、林間煖酒焼紅葉と、今誰か教ふるに此の如き風流の事を以ちてせしや、復其の罪を釋して問ひ、いざりしといふ。

(格言) 君子賢を尊みて而して衆を容れ、善を嘉して而して不能を矜む。(論語)

(教授要旨)

(一) 心性寛舒にして、事々寛恕の氣象あるべきこと。

(二) 善を嘉して、不能を矜むこと。

(三) 君子の量、大なること。

(四) 寛なれば、衆を得べきこと。

(教授方法)

格言嘉言の諸誦の機械的の記憶なれば、音調記憶の体裁を以ちて、時々之を演習すべし、即遊歩の際、又學校への往返に、金言名句を口にして、遊戲し、或行歩せしむべし、而して不知不識の間に諸徳を涵養するの益あればなり。

(問詞)

(一) 高倉天皇の御性質は、如何なればせしや。

(二) 楓樹につき、如何なることありしや。

(三) 仕丁を、如何に處せられしや。

(四) 信成は、仕丁を、如何にせしや。

(應用問詞)

- (一) 他人が粗相よて、汝等の手本、墨をつけなば、如何にするぞ。
(二) 汝等の家の奉公人が、過失にてランプを損しなば、如何に處置するか
書取題案

(一) □□賢ナ□□□□テ□□シテ衆ヲ容レ□□□□テ而シテ□□ナ○
○○○

義 勇

仁齋の第五子
を誰と
か
する

(例話) 伊藤長堅ハ京都の人として仁齋の第五子なり、蘭
嶋と號す、博學能文なること父及兄東涯より類す、而して舉
止端重なり、紀州侯其の該博を聞き之を聘す、其の始めて
君前に於きて書を講ずるや、書より對して默然口を開かず、
滿座の人掌に汗して以爲らく、此の人寒素に生長し未貴
人より説く習慣を、故より畏憚して然るなりと中使之を促

長堅講説の
模様如何

せども應せず、侯も亦之を訝る既にじて蘭嶋徐より曰、君公
禱に座す聖人の書を講ずべからずと、侯之を聞き遽より禱
を去る、是に於きて恭しく講説するは、音吐は朗暢よりして
辨論ハ快爽なり、一座みな歎じて曰、嗚呼眞の大儒なりと。

(格言) 自反して縮からば、千万人より雖、我往かん。(孟子)

(教授要旨)

- (一) 眞の勇者ハ安まり口を開かず沈黙なること。
(二) 正しき道に、つくすの勇氣あるべきこと。
(三) 正當の事を行ふには、決して懼るべからざること。
(四) 正理の存する限りは、王侯貴人と雖、憚ることなく、之を云ふべきこと。

(教授方法)

生徒をして、適宜の方法にて、讀み且講話せしめ、然る後教師發問して、生
徒の思想感覺を試みつゝ、其の補足をなすべし。

(問詞)

- (一) 伊藤長堅は、如何なる人なりや。
- (二) 君侯の前に於きて、書を講ずるとき、何故に口を開かずしや。
- (三) 講義を始めし時、聴衆は如何感ぜしや。

(書取題案)

- (一) □□しとねに□し□へば□□の□を□ヒがたしと云ひければ□□
を□き□に□をてつせり
- (二) □□シテ□□□□□□□□トイヘドモ□□カン
- (三) 貴人○前○出○□□□□□□□□

公平

天野康景は
何れの城主

(例話) 天野康景は徳川家康の臣にして廉潔の人なり、駿河の興國寺城主となり壹萬石を領す、適々居室を造らん

にして何万
石を領せし

天野康景が
代官井出甚
介に答へし
言葉は如何

と欲し竹木を伐り儲へ置きし、毎夜盗入りて掠め去り
ければ、歩卒一命じて守らめける、其の夕數十の群盗來
りて、卒の叱呵するをも恐まず掠奪を遂げんとす、卒大に
怒り刀を揮ひて一人を傷く、盗は徳川氏の邑民なり、傷く
もの代官に訴へて曰、天野氏の卒と忿争して傷つけらる
と、代官井出甚介人をして康景に謂はしめて曰、擅に公邑
の民を刃す罪輕らざるなり、速に犯者を出すべしと、康
景曰、盗を殺すすら尙罪なきに況て傷つくるに止るをや、
我之を誅すること能はざるを恨む、我が卒吾が命を受け
て盗を備ふ、盗至りて之を撃つ固より其の處なり、何の罪
かあらんと、適家康至る傷を被るもの自駕に就きて訴ふ、
是に於きて代官を召し之を問ふ、皆前言を執りて決せず、

本多正純は
天野康景に
何と云ひし
や

家康曰、康景僞を言ふものあらす、僞り或訴ふる者あるらん、因りて命じて之を罷めしめ、本多正純をして康景より言はしめて曰、彼ハ公邑の民なり、子が卒ハ私人なり、私義を以ちて公威を損すべきならんやと、康景曰、直を枉けて曲に従ふハ吾爲す可忍びず、我が卒賤と雖、吾の命を奉トて盜を禦ぎしものにして罪ある可あらざるなり、其の之を枉殺せんよりの吾寧罪を蒙るも公法を廢すべけんやと、遂ハ城邑を棄てて去る、識者其の高風清節を稱して希世の名賢とす。

〔格言〕 大丈夫は、正大を以ちて心を立て、公明を以

ちて事を行ふ。（續讀書錄）

〔教授要旨〕

- (一) 公平の心を以ちて、事を處理すべきこと。
- (二) 光明正大なる行ハ天地に耻ぢざること。
- (三) 直を枉げ、曲に従ふべからざること。
- (四) 公法を廢すべからざること。

〔教授方法〕

公平といへる解釋より、愛憎を以ちて正理を枉げず、私事を以ちて公理を害せず、正當公平に事を處理すべきことより、本題の事實に説き及ばし、格言に歸納すべし、猶一個人の意志は、時として熱情或利己心の爲に、多少左右せらるゝものなれば、之を抑壓制限すべきことをも注意教授すべし。

〔問詞〕

- (一) 天野康景は、誰に事へしか、又如何なる人なりや。
- (二) 盜あり竹木を掠む、康景如何にせしめしや。
- (三) 傷者は、如何にせしや、代官ハ、又如何にせしや。

- (四) 康景の如何に答へしや、家康の如何にせしや。
(五) 康景の終は如何にせしや。

(應用問詞)

- (一) 大丈夫正大を以ちて心を立て光明を以ちて事を行ふ、終は邪暗小人の惑す所となりて、其の守る所を易へず、(譯文) どの如何なる意味か。
(二) 凡人の事を處する只道理如何を問ひ、隨ひて之に應ず、往きて中らざることをなし、若先偏主あり、傲し來らば、畢竟不是なり、(陳白) どの意解をなせ。

(書取題案)

(一) □□□□ハ□□□□チテ□□□□チテ□□□□チテ□□□□

尊王

(例話) 本居宣長は有名なる國學者あり、伊勢の國松阪に

本居宣長の性質は如何

古事記傳の誰の著せしものなりや

生る、幼より群童に秀拔し、遊戲を好まず、讀書に耽る性強記絶倫なり、父母其の才を愛す人となるに及びて京師に往き堀景山に師事し、經史百家の書を學び、傍醫術を武川法眼に受け並し之を能くす、後加茂眞淵を師とし大に國學を學び其の蘊奥を極む、時に漢學者支那を尊みて我が邦を卑むるを慨歎し、馭戒慨言と名くる書を著して、大に其の非なることを痛く駁論したりき、古事記は皇朝の古傳古語を存して絶て漢意を交へず、故に貴きこと他書の比にあらず、然れども難語多くして讀み易からず、故に先輩之を解くことをなさず、宣長之を歎じ大に精力を盡し遂に古事記傳五十卷を著して天下に示す、其の考證の精密なるや、千載の疑惑を氷解し、後人を誘掖する功偉大

孝仁天皇の
愛重せられ
し何書か

なりと謂ふべし、是を朝廷に献せんとせしが、布衣の著述
天覧に供するに恐れ多しとて、廷臣之を捧けざりし、其の
後數十年を経て、孝仁天皇常は古事記傳を讀み給ひて特
に愛重せられ、瞬時も傍を放ち給はざりしと云ふ、世の人
以ちて死後の名譽とせりといふ、其の他著書數十種皆
世に稱せらるなり。

(格言) 物みふは、かはりやけども、あきつかみ、わが

大君の御代はこころしへ。(本居宣長)

(教授要旨)

- (一) 常に皇恩に報い奉ることを、心掛くべきこと。
- (二) 君に忠節を盡すに、臣たるものの務なること。
- (三) 忠を盡し、命を致すに、人臣の常道たること。

(四) 君と國との爲に、其の力を盡すべきこと。

(教授方法)

君のため、民の爲とて學ばすに、

螢も雪もあどかあつめん。(大納言師範)

此の歌意より説き起して、本居宣長の勤學及御國の爲に書を著し、萬世
無窮の皇運を扶翼し奉りしことより、格言の歌意に歸納すべし。

(問詞)

- (一) 本居宣長の何國の人にして、誰を師として國學を研究せしや。
- (二) 宣長の、何故に國學を尊みしや、且如何なる書を著せしか。
- (三) 古事記傳の、何帝叙覽せられしや。
- (四) 取戒概言といふ如何なる書ありや。
- (五) 本居宣長が、經史百家の書を研究するとき、誰を師とせしや。
- (六) 又醫學の誰に就きて學びしぞ。

(應用問詞)

- (一)菅原道真公の事蹟を陳述せよ。
(二)勅語を宣ひし天壤の無窮の皇運を扶翼すべし、如何なることか。
(三)我が邦の萬國に比類なく、卓絶せし何ぞや。

(書取題案) 左の句を書取らしむべし

- (一)物みな、かゝりゆけども秋津神、
わが大君の御代にこそしへ。
(二)常に漢學者が我が邦をいやしむ風あるをいたくなげきて古き道を
明よし

(三)我が邦は外國となりて萬世一系の天皇をいただき君臣の名分
ただしきことをひとかたならず論じけり

(四)君のため民の爲として學ばずは、
螢も雪も、なかあつめん、

(五)天壤無窮の皇運を扶翼すべし

尋常
小學
修身教科書
尋常第四年級終
教師用

K12.1.1

明治廿五年五月三日印刷
明治廿五年五月九日出版

正價金拾五錢

版權登

著者 岡村増太郎

發行兼印刷者 大橋新太郎

日本橋區本石町三丁目拾六番地



東京日本橋區本石町三丁目拾六番地

發兌元博文館

從一位伯爵東久世通禧公題辭 佐々木信綱君著
宮中御歌所長從三位男爵高崎正風公題歌
從三位子爵福羽美靜從五位小中村清矩而公序文

歌の架

全壹册紙數千六百頁以
上綴皮金字入上裝美本
仕立正價金壹圓六拾錢
通運料金拾五錢

目次 上編 總論 歌の沿革 歌の種類 中編 題便覽 冠辭便覽 假名下編 作法類語集
歌は文學の神髓にして、其高尙優美なる事他に及ぶべきものなし。うべなり、歌人一首の詠は天地を動し、鬼
神を感ぜしめ、一世を風動し、萬古に傳唱し、神代に及ぶより明治の聖代に至るまで、歌人一首の詠は天地を動し、鬼
龍も多しといへども、未だ完成せる書ある事なし。故を以て、少壯にして歌人の名高く、且歌學者の魁たる數
佐々木君、未だ大學に在し、時此書を草し、其卒業論文に出されたりき。爾後筆硯に暇なき中より、増補改訂たる
藻華類法則は、最密に最見識高く、雅遊はあらゆる歌の上の遊を載せ、書式は當時の能書多田親愛君らに請て
名筆七葉を載せ、中編に載せられたる作法類語集、例名歌集は、各題につきて其作法類語を懇切に説かれ、べか
らざる所にして、下編に載せられたる作法類語集、例名歌集は、各題につきて其作法類語を懇切に説かれ、べか
最卓絶せる秀歌を示されたり。古來かつてかくの如く歌に關する一切の事を網羅せる書なし。殊に戀歌をば、
新題詞書題を加へ、世の歌人諸君並に歌に志す諸君、必ず一本を座右に備へられん事を
り。出たる結果なり世の歌人諸君並に歌に志す諸君、必ず一本を座右に備へられん事を

